
ブラック・コーヒー（改稿版）

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラック・コーヒー（改稿版）

【Nコード】

N8614X

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

「ブラック・コーヒー」の改稿版です。人称が微妙に変わっています。第三部からやばくなってくので、ノクタに移動します。

第一部

タバコがないとオレはとても生きていけない。我が恋人だ。
一日に二箱は絶対に必要だ。どんなに値上がりしても、所得がへ
つても。

オレのステキなタバコ。

タバコとキスをしているときの気持ちよさ。たまらぬ。
人は愚かだというけど大好きなんだ。

タバコ。

たけしは煙草に火をつけた。

「ふー。さて。書類書けたし、あとは銭湯にでも行こうかな」
たけしは車に乗り、走った。

君が代は 千代に八千代に
さざれ石の 巖となりて
苔のむすまで

カーラジオから流れる国歌。なかなかいい感じた。元氣が出る。
たけしは、銭湯の駐車場に入った。

数週間後、ロリ華がたけしのもとを去った。理由なんてわからん。
朝起きたら置手紙だ。まったく何もかもやる気が起きない。仕事に
行く気もせん。

しかし、仕事に行ってしまう社会人の習性よ。職場でもロリ華の
ことばかり考えている。レジを打ち間違えてお客さんに怒鳴られた。
「五十万円も買ってねえぞコノヤロウ！」

スーパ―の仕事が終わり、自宅で執筆に入る。入るけどなかなか
集中できない。ロリ華のことばかり考えている。

たけしはふてくされて、大の字に寝転がった。ああ。暑い。
かき氷を買っておいたのを思い出し、冷凍庫を開け取り出し、食

う。ちべたい。

ともかく、ロリ華のことばかり考えてしまっ。

ロリ華。ロリ華。ロリ華。

どうにもやるせないの、車に乗って銭湯まで行った。汗を流そう。

たけしは、どこへ行こうとしてるのか。目的地はあるのか。ただ歩いてるだけなのか。人生つうのは常に方向音痴である。あっちへ行ったりこっちへ行ったりふらふら実に頼りない。ロリ華がいなくなってから特にそうだ。心にぽっかり穴があいているとある日。

どおおおおおん。

「大変だ。二丁目のコンビ二で」

「自爆テロか??」

みんながわらわらとそっちの方へ走っていく。たけしは用事があったので逆方向へ急ぐ。

「あ。雨だ」

ぱらぱらと降り始め、いつの間にやら、豪雨になってる。

ざああああああ。

たけしは走る。ひとまず、近くの喫茶店に入った。からんころん。

「いらっしやいませー」

たけしは店員さんにタオルを借りた。「ありがと。じゃあちよつと冷えたから、ホットコーヒーちょうだい」

「かしこまりました」

たけしは煙草を吸いながら新聞を眺める。

「ふむふむ。ええええええ」

たけしは飛び上がった

「こうしたやおれん」

たけしはコーヒーを飲まずに会計だけ済ませ、外へ飛び出した。すでに雨はやんでいる。

とにかく走る走る。「ま、間に合うだろうか?」

通行人が、たけしに「がんばってえ」と声をかける。オレは、どもどもと会釈をしながら走った。

しばらくすると、アスファルトに死体がごろごろ転がっていた。

ま、まさか。

遠くで、おばはんが包丁を振り回して、みんなが逃げ回っている。おのれ。通り魔か。

車椅子の子がおばはんには捕まり、包丁で背中を何回も何回も刺されている。「うぎゃああああああ」

たけしはむかついてきて、おばはんのところまで走り、おばはんを回し蹴りを食らわした。

おばはんはアスファルトに転がった。「ふあああん。ふあああん。痛いよう。痛いよう」

わんわん泣き出した。

「ちっしょうがねえなあ」

たけしはおばはんを背負った。「病院まで連れてってやるよ」

おばはんはたけしの背中に包丁を刺した。「うぎゃああああああ

ああ」

たけしはあまりの痛さに、おばはんを放り投げ、ものすごいスピードで走り出した。

「うわーーーいたーい」

回りをよく見ていなかったたので、工事中のマンホールに落つこちた。

「うわああああ。落下するうつつうつつ」

たけしは落ちながら下を眺める。むっちゃ暗い。むっちゃ深い。

三分経つても五分経つても全然着地する気配がない。「くそ。こんなことでは約束の時間に合わないよ」

たけしはなんとか上昇しようと思って、下方に尻を向けおならを思い切りこいた。

ぶおおおおおお。

ジェット噴射ならぬおなら噴射で、上昇し、マンホールを飛び出す。勢いよすぎ、まだまだ上昇する。

「うわあああああ。どこまで行くんやああああ」

上昇しながら、宇宙まで行ってしまうんだろうか、と思っていたが、ちょうど上方を飛行機が飛んでいた。飛行機に激突し、落下するというパターンだろうか？

ずがあああああん。

違った。飛行機のボディを突き破り、オレはさらに上昇した。飛行機は炎を上げ墜落してゆく。えらいこっちゃ。

たけしは疲れたので、銭湯へ行った。

ともかく、たけしの元を去ったロリ華はすでに別の男性と結婚していた。

ある控え室。大竹誠は、椅子に座ったままじっと動かなかった。

そして、大粒の涙を流した。ボクシングの試合に負けたのだ。会長は誠の背中を叩いた。

「オレに触るな！」

会長はびくつとした。

「す、すまねえ会長」

会長はちよつとむつときた。

「ふん。弱いから負けたんだよ。ただそれだけさ」

「なにに」

誠と会長はにらみ合った。

会長はファイティングポーズをとった。誠は舌打ちした。会長はじじいである。普段なら一発で倒せる。しかし、今は試合が終わり疲労コンバイしている。とても相手などしておれない。

「ふん。びびってるのか」

あー！ー！！！むかつくこと言うなー！ー！ー！！！

しかし、誠は無視した。バカに付き合ってる場合じゃない。少しでも体を休めないで。

会長は誠のカバンから、お守りを取り出して見せた。

「ああそれはロリ華からもらった勝利祈願のお守り」

「ふん。負けたんだからもういらないだろ？」

会長はふふふと笑い、それを床に落とし、足で踏みつけた。

「じじいいいいいいいいい」

頭に血が上り、誠は会長の胸倉をつかんだ。

「ふん。いい目してるじゃねえか」

「は？」

「そういう熱い目をしてるならまだまだ行けそうだな」

会長は、ふふつと笑った。

「か、会長」

誠は涙が出そうだった。今度は負けたことからくる悔し涙ではなく、嬉し涙であった。

「あ。そうそう。奥さんから預かってるものがあるんだ」

「え。なに」

会長は自分のカバンをまさぐった。

「ははっロリ華ちゃんから、新しいお守りあるんだ。うへへへ」
なんだろう。

「じゃーん」

会長はカバンから、ブラジャーを取り出した。

「そ、それは」

「ロリ華ちゃんのブラジャー。お守りだよ」

「ほえ」

誠はふふつときた。天然のロリ華らしいや。そんなでオレがやる気が出るとでも？

出るとも！

「会長、ありがとう」

「なんかあげたくないな」

「は？」

「これ、わしのお守りにしよ」

「ちょ、何言つてんすか。人の女房の」

「これでいろいろ遊ぶ。ぐふふ」

「てんめーーーーー!!!!!!」

大乱闘。

しばらくしてロリ華がやって来て、下着泥棒を叩きのめしたことは言うまでもない。

ボクサー誠の弟、義彦は売れない漫画家で、自室で漫画を描いていた。

暑い。汗がだらだら出る。滝のように出る。暑い。暑い。暑い。

暑いというと余計暑くなると昔母に言われた。涼しいと思おう。

涼しい。涼しい。涼しい。

うきーーーー。余計暑い。

義彦は、ティーシャツを脱ぎ、上半身裸になった。くそう。クーラーほしい。

と愚痴愚痴言っても締め切りは来る。義彦は黙って、原稿を描き始めた。

汗が原稿に落ちて線が流れた。

むきーーーーーちきしょーーーーー。

義彦はもうこのままでは頭がおかしくなると思い、映画館に行くことにした。映画館はきんきに冷えている。

何か良いのがやってないかな。雑誌を眺める。

ううむ。ほとんどハリウッドやなあ。こんな暑い日にハリウッドはやだなあ。

お。

なにこれ。タイトルがいい。森の神秘。なんか涼しそう。

義彦は出かけた。

映画館に到着し、切符売り場で切符を買う。

席に座り、待つ。ううむ。冷えてて気持ちいい。

始まった。

なんじゃこら。

ずっと、山の様子を流してる。森。せみの声。清水のせせらぎ。癒し系だろうか。

十分観ても二十分観てもずっと、それである。

だんだん義彦は気持ちよくなってきたて寝てしまった。

目が覚めたら、夕方になっていた。へーつくしょん。これはいかに。風邪引きそうだな。

鍋焼きうどんでも食べたいな。妻は旅行でいないし。よし。今日はそれにしよう。

義彦はスーパーで買い物した。

そして、その晩、鍋焼きうどんをはふはふ食った。ううむ。暑いときに熱いもの。いい汗かいて最高なり。夜は風も気持ちいい。

義彦は再び、執筆を再開した。

アイデアが出ない。

風鈴がちやりと鳴っている。

ううむ。アイデア。アイデア。壁に頭をがんがん打ちつける。何も出ない。ううむ。ちきしょう。

ロリ華と誠の間に赤ちゃんができた。

しかし、赤ちゃんは引きこもっていた。出てきたくないと言うのだ。いろいろな事情からもし出産となると赤ちゃんは生まれるにしても、母胎に深刻な影響を与えると、お母さんの腹の中の部屋の中から、医者とお母さんお父さんが話していたのを聞いてしまったのだ。

赤ちゃんもまだ生まれていないとはいえ、バカじゃない。お母さんの身体を犠牲にしてまで生まれるつもりはない。

暇なので赤ちゃんは、羊水の中でPCをやっていた。ネットに書き込みなんてしとる。返信してくるのもだいたい、お母さんの腹の中にいる胎児たちだ。

もっこすけ（ロリ華と誠の赤ちゃんのHN。なにしろ、まだ名前が

ないから）・オレ誕生するかどうか迷ってたんだ。オレが誕生するとおふくろが死んでしまつかもしれねえんだ。

ぶりお・それは葛藤だねえ。母親をとるか自分をとるか、か。どっちも大事だからなあ。難しいねえ。うーむ。ハムレットの心境だねえ。生きるべきか死ぬべきか。。。　（作者注・なんで胎児がシェークスピア知ってんねん！）

ミツコ・あたしだったら生まれるな。ママには悪いけど、あたし生きたいもん！

ぶぶぶぶ二世・オレはやだね。母ちゃんを犠牲にしてまでオレは生きる価値のある男かどうかまだわかんねえからな。女はやだね。自分のことばかり。

ミツコ・何よ！　まだ生まれてもないくせに！

ぶぶぶぶ二世・てめえもだろ！！！！

赤ちゃんは悩んでしまう。ため息が出てしまう。みんないろいろな意見を言う（全員まだお母さんの腹の中にいるのだが……）色々意見を言ってくれるのだが、どれもこれも今一つだ。なーんかなあ、という感じだ。

たけしの職場にかわいい女子が入った。彼女の笑顔は百万ドルの笑顔だ。太陽の輝きだ、とたけしは思う。さんさんと輝いてる。見てるだけでまぶしい。

だから、つい目をそらせてしまう。

「たけしくん。なんであたしと話すときすぐに目をそらすの。あたしのことが嫌いなのか」

「いやその。あのう」

「ほら！ また目をそむけてる。もう知らない！」

彼女はぷりぷり怒って行ってしまった。

たけしは、あかんこのままでは彼女に嫌われてしまうと思う。

たけしは何かせんといかんと思い、太陽を見て訓練しよう。

しかし、当たり前だが、すぐに目が痛くなつて断念。

「うう。どうしたらいいんだ」

コピー機でコピーをとっていたら、彼女がやってきた。

「たけしくん。この書類もついでに」

うわああ。また百万ドルの笑顔。ま、ま、まぶしい！

たけしは「焼け死ぬ！」と思い、思わず後ずさりする。

「うわ。ぶちえさん。こつち来ないで。いや。だめ。まぶしい」

「もう！ またふざけて！ これちゃんとコピーしといてよね！」

彼女はまたぷりぷり怒って去る。

ああ。やばい。こんなことではほんまに嫌われてしまう。

たけしはじゃあどうしようと考えた時に彼女は顔が丸いので卵と

思おうと考えた。卵なら見ることができる。

「たけしくん。この企画なんだけど」

来た。

ようし。卵、卵、卵。

うひゃあ。あかん。卵まで輝いてる。金の卵だ。

たけしは目をぱちぱちさせた。

「もう！ またふざけてるのね！」

ああ。卵が怒ってる。

しかも、卵を凝視してたら、腹がへってきた。

ぐう。

「あー人が話してるのにお腹鳴らして失礼な！ もう知らない！

この企画案明日までにまとめておきなさいよ！」

また彼女はぷりぷり怒って行ってしまった。ああ。オレってだめ
だなあ。

夜になり、カップ麺をすすりながら、窓の外の月を眺める。彼女

の顔に見えてくる。月は見ることができただけどなあ。

蒲団の中で奇妙な夢を見た。彼女がすごく暗い顔をしているのだ。あのまぶしい彼女が、暗闇の中でさびしそうにしている。

たけしは声をかけずにいられない。

「どうしたの」

その瞬間、彼女がピカツと光り、彼女の体から四方に向けものすごい風が吹き、たけしはふっ飛ばされた。

きのこ雲。

朝起きて汗びっしょりであった。

「げ、原爆かいな……」

たけしはこのままではストレスでどうにかなってしまふなあと思う。

そんなある日、課長がお前来月から埼玉店に行けなと言った。

たけしは、やったぜこれで彼女から離れられるとちょっと安心した。もちろん、ちょっとさびしいのも事実だけど。

彼女が来た。やばい。またまぶしさに目をやられてしまう。サングラスかけようか。

「たけしくん」

あれ。まぶしくない。

「たけしくんが行っちゃうなんてぶちえやだよ」

あれえ？ どうなってるんだ。彼女が泣き出した。

「やだよ。やだよ。たけしくんがいなくなるのやだよ」

彼女がたけしの胸で泣く。

なんだ。全然まぶしくないぞ！

義彦の妻はむちゃくちゃ胸がでかい。カップでいうと、EとかFとかなんてものじゃない。Nカップくらい。もちろんそんなブラ売ってないので常に特注だ。

アルミ缶を机の上に乗せボインで叩きつぶすこともできる。だから義彦はなるべく夫婦喧嘩はしないようにしている。絶対に殺される。

やはりボインだと肩がこるらしく、義彦は仕事が終わりに疲れていても、妻の肩をもんであげる。あげないと、ボインで顔を殴られるので仕方がない。一度断り殴られ鼻の骨を折ったのでそれ以来逆らわないようにしてる。

「気持ちいいかい？」

「ああ。そこそこ。気持ちいい」

「そりゃよかった」

妻が喜んでくれるなら義彦も嬉しい。

そんな妻は警察から表彰とかもされる。

ある晴れた休日の午後。義彦と妻は買い物に出かけるために歩いていた。

「ひったくりよう！」

「はあはあはあ」

「待てえええ」

「待てと言われて待つバカはおらん！」

引ったくり犯がばあさんのバッグを抱えてすごいスピードで義彦たちの方へ走ってくる。

普通の女ならビビって何もできないが、さすが義彦の妻だ。

「やあ！」とジャンプし、ボインを犯人の頭に振り落とした。

「うぎゃあああああああ」

アスファルトに転がる犯人。

「おのれ。犯罪者め」

犯人は、妻に執拗に殴られる。もちろん、ボインで。

「むぎゃ。むぎゃ。むぎゃあああああああ」

「あのそのへんで、あのう」

ばあさんがあたふたしてる。妻の目はもはやばあさんなど眼中にない。

「このやろう！ このやろう！ このやろう！」

「ボインのおねえさん、やめてあげて！！」

警察が来たとき、犯人は肋骨を数本折り、もうすでに虫の息であ

った。肋骨が心臓に刺されれば死んでいた。

「はははは。すごいすねえ。はははは」

警察も苦笑いだ。

妻の胸元には犯人から浴びた返り血。

まったく正義なのか悪魔なのかようわからん妻。でもそういうところも妻の魅力だと義彦は思う。正義はつまらないし、悪魔は迷惑だろう。

なんか間違ってる気もするが夫婦愛なんてそんなもんだ

結局たけしは、ぶちえと遠距離恋愛することになる。

休日にぶちえと駅前で待ち合わせをする。ぶちえは息を切らせて走ってくる。

「はあはあ。待った？」

「全然。行こうか」

「うん！」

ぶちえと電車に乗る。ネズミランド行きという電車だ。早くジエットコースターに乗りたいねえと笑い合っていたのが失敗だった。すでに始まっていたのだ。

電車はいきなり時速200キロで走り出す。

「うわああああああ」

「きやああああああ」

なんかシートベルトがあるから変だと思ってたんだ。

その後、電車は急上昇したり一回転したり急下降したり大変だった。げっそり痩せた。

ぶちえとたけしはすっかりど肝を抜かれぐったりしてしまった。しばらく、電車はがたごとゆっくり走る。

外の景色でも眺める。

なかなか楽しい眺めである。西部劇のような景色になってきた。

インディアンがカウボーイに追いかけられてる。

「はははっ。おもしろい」

「あっ銃撃戦してるよ」

かと思えば、いきなり、町並みが未来的になってくる。高層ビルが立ち並び、車が空を飛んでいたりする。二人してすごいねえすごいねえと言っている。

「しかし、ネズミーランドにいつ着くんかねえ」

「ねえ」

「弁当はいかがですかあ。弁当はいかがですかあ」
もうすでに腹がへってきたので頼んだ。

「わあすごい。松坂牛のサーロインステーキ弁当」

「オレなんて中トロ弁当」

二人してがつつく。

食べたたらだんだん眠くなってきた。車内の照明が薄暗くなってきた。すると、外はいつの間にか暗い。

「わあ。外見て」

「すごい」

エレクトカルパレードだ。電気でちかちか光ったキャラやセットが躍りながら行列行進してる。すごくきれい。ぶちえとたけしはうつとりしてきてワインを飲みながらキスをした。

そのうち、電車は徐々に徐々に上昇して行き、すでに空を飛んでいる。まさしく銀河鉄道である。すでに夜の十時。

二人はネズミーランドなどどうでもよくなり、疲れてグースカグース力寝ていた。

ぶちえの妹、華子は同僚の米田にふられてからやけ食いするようになった。今では、四五キロだったのが、一二〇キロある。ちびだから相当横に広がった。

「あーあ。これじゃあ、食費がかさんで生活できんわ」

華子はダイエットすることにした。まず単純に食わないようにするため山の寺に入った。

「ええっこんだけえ」

和尚さんに出された精進料理は、いわゆる豆腐のステーキであった。

「味はいいけど、物足りないわねえ」

和尚さんは華子が六つも食べるので、「いいかげんにしないか！」と怒鳴ったら、華子に張り手を食らわせられた。

ものすごいパワーなので和尚さんは数メートル後方にぶっ飛んで、小坊主たちが下敷きになった。

「は、華子。滝に打たれてきなさい。いててててて」

「はい」

華子は滝にやってきた。水着に着替えているが、誰かが見たら相撲取りだと間違えるだろう。

「うつつ寒いなあ。お。魚おるやん」

華子は魚を、手で殴って獲った。熊か。

そして二十匹くらい獲ったら、火を焚き、串に魚を刺して塩をまぶして焼く。

「ああ。旨そうな匂い。たまらんわ」

華子はむしゃむしゃ食いまくった。

結局こんな調子だったので、寺は意味がなかった。

華子は悩んだ末、スポーツをすることにした。汗を流せば少しはやせるだろう。最初からすればいいのに。

そんなわけで、ぶちえはたまに華子に相撲の相手をさせられる。

ぶちえは小柄なので投げ飛ばされてばかりだ。

「はははは。おもしろい」

「笑い事じゃないよ。たけしくん」

たけしはレモンスカッシュをちゅーと吸った。

しかし、華子はでぶになってから、意外とモテるようになった。

世の中にはそういうマニアもいるのだ。

営業二課の西本が華子にアプローチしてきた。無論、あまり華子の好みではない。しかし、でぶになっちまった以上あまりぜいたくも言ってもらえないなと思い、付き合い始めた。

西本の弟、西本金太郎は非正規労働者である。現在、三四歳。月収一〇万円のため十年くらい公園に住んでいたが、最近兄が拾ってく

れた。朝はスーパーで非正規労働をし、夜は塾で非正規労働をしている。

低所得のため、結婚できず、いまだに童貞である。

金太郎は公園時代からずっと小説を書いていた。おもにギャグ小説だ。

華子は、西本の弟、金太郎に恋してしまった。どうもこういう夢見るタイプに弱いようである。しかし、西本はキレイやすいので、ナイショである。

「まずいよ華さん。兄ちゃん帰ってくるよ」

「大丈夫よう。今日、残業だつて言つてたから。ねえん。キスしよう？」

「だめ。だめ」

金太郎はもしこんなことが発覚したら、兄に家を追い出されると思い、あわてて、部屋を出た。地獄の公園暮らしがフラッシュバックしたためである。

原付に乗り、近所の喫茶店へ。閉店までそこで小説を書いた。コーヒー一杯で実によく粘った。

「あー疲れたな」

そのまま、金太郎はビデオボックスへ。兄に居候するようになってから金太郎はこういうぜいたくを覚えた。オールナイトコースを選び、朝までそこでDVDを観たり執筆したりする。そしてそのままそこからスーパーの非正規労働に行くわけだ。

一応、兄には電話した。兄は「ぜいたくばつかすんなよ」と怒ったが、弟には弱い。非正規労働も低賃金重労働でストレスたまるからなと少し思つて許している。

その夜、華子と西本は部屋でむっふふふふふ。これは少年誌のため細かくは描写できません。あしからず。

ともかく、金太郎にとって、小説というのは、この厳しい「低賃金重労働」という非正規労働を生き抜くための武器であるようである。なにしろ、小説というのは十万部売れば印税が一五〇〇万円

入る。しかも書くのが楽しい。楽しくて大いに儲かる。大きな武器だ。苦しくて全然儲からない非正規労働の逆である。

河野夜兎という子がいる。この子は実在の人物である。西本が投稿している無料小説投稿サイトで、夜兎も小説を書いている。そこで知り合った。夜兎は西本の熱心な読者であり、西本もまた夜兎の励ましに助かっていた。

夜兎にはプロ志向はないようだが、なかなか楽しんで書いているようである。なによりだ。最近は職場のおばちゃんの息子に向け、野球小説をサイトに連載している。

無論、西本はプロ志向である。まあ西本も楽しんで書いているが半分プレッシャーである。非正規労働を一生続けるわけにはいかない。いずれ、小説を所得にし、専業作家になり、家を建て奥さんをもらい子どもを作っていかねばならない。いつまでも兄に迷惑はかけられない。

金太郎は、しかし、ある日、交通事故にあい、入院してしまった。金太郎はこの事故により、両腕と両足を失ってしまった。

「あーあ。何ということだ」

ただ救いは、ちんこがまだあることである。セックスはまだできる。今はセックスボランティアというのがあることだし。

小説も、口でペンをくわえて書けばいい。ラクシヨード。

華子も金太郎のことが心配で心配で、やせて、もとの美人に戻った。

華子は、西本と別れ、金太郎の世話をすることにした。しかし、金太郎は当然、西本に家を追い出された。華子の部屋に住むことになった。

もちろん、華子と金太郎はエッチなこともするのだが、これは少年誌なので書けないわけである。ごめんなさい。障害者のセックスおもしろそうだが、青少年保護育成条例は遵守せねばならない。

ある日、金太郎を車椅子に寄せ、華子は散歩に出かけた。

「華さん。ぼく、スケボーがほしいなあ」

「だめ！ あぶないよ！」

「ちえっ」

風が気持ちいい。華子と金太郎はここにこだ。

「ぼく、華さんといっしょでうれしいなあ」

「あたしもよ。金ちゃん」

野良犬や野良猫がひゅーひゅーとはやしたてる。

金太郎と華子の間に待望の子どもが生まれた。銀次郎という名前にした。

銀次郎は先天的な病気で、下半身を切断せざるをえなかった。

華子は、なかなか大変である。旦那は両腕と両足がなく、子どもが下半身がない。世話が大変である。

しかし、ここでまたもや悲劇が起こった。華子が買い物中、トラツクにはねられ、死亡してしまったのである。

困ったのは金太郎と銀次郎である。銀次郎、このときすでに五歳。

「父ちゃん。ぼくたちこれからどうなるの」

「さっぱりわからん。大変なことになることだけは確かだ」

夜は更ける。遠くで犬がわおーーんと鳴く。

銀次郎は悩んだ末、スケボーに乗り、郊外にある、山田科学研究所というところに行った。こうなったらサイボーグにしてみらおうと考えたのだ。

山田博士はおやめなさいと言ったが、銀次郎の熱意に負け、手術をした。

その結果、銀次郎のボディはすごいことになった。脳みそ以外、すべてロボットである。オイルを入れるフタが胸にある。足に穴が開き、ジェット噴射で空を飛ぶこともできるし、怪力だ。車なんて余裕で持ち上げられる。目からはライト。数ヶ国語をしゃべることができ、銃機能も内蔵されている。

博士が鉄腕アトムの大ファンだったので、このようになったのだ。

これにより、助かったのは金太郎である。銀次郎に世話してもらうようになった。

華子は天国からそれを眺め、ほつとしていた。

華子が生きてるときに友達だった、もりえは、高校の教師をしていた。国語を担当している。

もりえは、体育教師の吉田のアプローチに困っていた。常にジャージを着てる筋肉バカで、とにかくしつこいのだ。

もりえが呼んでもいないのにメシを食べに来たりする。なんだか付き合ってるみたいで腹が立つ。

吉田は、ビートルズが好きでバンドを組んでいた。地元のライブハウスに出演し、出演料ももらってるから半プロだ。ただ趣味色が強いので学校を首にならないのだ。

また、吉田はお笑いが大好きで、コント撮影などもたまにする。友達を呼び、セットを用意し、ミニコントを撮って、文化祭とかで上映している。筋肉バカなのでバカな生徒と波長が合い、毎年バカウケだ。

あるいは、家では、漫画と小説を書いていた。描いた漫画をノベライズとか、書いた小説をコミック化、なんてこともしてる。一度、学校で販売しようとして校長に注意された。

しかし生徒が読みたいというので、教室の後ろに置くという形で収まった。各クラスに一冊ずつ「月刊ポンチョ」がある。吉田が制作した漫画・小説を中心に、生徒が書いたのも載せたりする。

そんな吉田が学校を辞めてしまった。応募した小説が新人賞に入賞し、次回作を書いていたのだが、編集者に何回も何回も書き直しを命じられるので、無事出版はできたが、これは教師をしながらやつのはつらいということで専業作家になることにしたのだ。

生活は教師時代よりラク。デビュー作と次回作がそれぞれ十万部売れた。新人としては異例の部数だ。印税が2000万円入った。

吉田は、しかし教師時代がなつかしいなあと思い、塾のバイトを始めた。バイトなら何とか小説と両立できるってなわけだ。

もりえのクラスに一人変なやつがいた。田中だ。

田中は、なぜか知らないけど、語尾に必ず「〜ごんす」とつける。

「田中くん。宿題忘れたの？」

「忘れたでござんす」

「田中。プリンちょうだい」

「いやでござんす」

万事この調子だ。

しかも、制服を着て来ない。貧乏設定なのかどうか分からないが、毎日ランニングシャツだけである。

しかも過去に三回、教室でうんこをもらしたことがある。こんな感じだから、田中には友達がいなかった。

田中は一人さびしく公園のベンチに座っていた。

「あーあ。つまらないでござんす」

夕暮れ。カラスがかあかあ鳴いている。涙が出そう。すると、前にいたハトがしゃべった。

「さびしそうだね。少年」

「えっハトが！」

「はっはははは。そんな驚くな」

「驚くでござんす！」

田中は気が動転して、ハトの頭を空手チョップをし、気絶したところを毛をむしり、焼いて食べた。

「むしゃむしゃ。旨いでござんす」

田中は損した。このハトは流れからして、鳥たちが経営する空中王国に、さびしい田中を連れていってあげる予定だったのだ。

田中は自らそのチャンスを逃してしまったのだ。田中のバカ！！田中には弟がいた。ぷりおという。ぷりおは小学五年生。ぷりおもちよつと変だ。しゃべるとき、語尾に「ーやんす」をつける。兄の影響であろうか。

ぷりおは実は今恋をしている。華子という同級生を好きになっしまった。

華子は天然であつた。かわいいけど天然であつた。ぷりおが華子にカレーを大盛にしてあげたり、いじめっ子から救ってくれたり、

宿題を見てあげたり、色々優しくしてあげても、ぷりおが華子のことを好きということに全然気づかない。

「切ないでやんす」

そんな華子は同級生の清彦に恋をしていた。清彦はイケ面である。スポーツもできるし、勉強もできる。

しかし、清彦にも弱点はあった。

彼は下着泥棒だったのだ。

イケ面で勉強ができてスポーツも得意な清彦がなぜ下着泥棒をしているのか。

それはアホなことができないストレスからである。ブサイクで勉強ができなくて運動ができないやつがうらやましい。バカにされるのがうらやましい。清彦はアホなことができないのが苦痛で苦痛でたまらず、下着泥棒になってしまったのだ。

清彦は今日もまた夜に家を抜け出した。

あるアパートの前に来た。一階に下着が干してある。きっと独身のOLとかで昼間干せないから干してあるのだろう。

清彦は興奮してならない。

ああ。パンツ。ブラジャー。ほ、ほしい。

清彦は、しかし、電気がついていたので、寝てから盗もうと電柱の影に隠れていた。

「ああ。もし盗んだら、パンツを頭からかぶろう。ぐへへへへ」

こんな姿、小学校のみんなが知ったらびっくりするに違いない。

下着泥棒というのは確かにいけないことではあるが、ストレスが大きすぎると誰でもやってしまう可能性はある。

内閣総理大臣、ヤン・マオトもその一人であった。彼は相当盗んでいる。これが発覚すれば、大きな社会問題となるであろう。

運転手に車を止めさせるヤン。

「いいか。私が下着を盗んでくるまでここを動くな。盗んできたらすぐ私を乗せて逃げる。いいな？」

「わかりました」

運転手・大山モリオは、あくびをしながら、ヤンを待つ。正直、うんざりである。

モリオはヒマだったので雑誌に目を落とした。お尻くんという連載小説を愛読している。

お尻くんはお尻の顔から足と腕が突き出した一等身のギャグキャラクターである。

「うふふふ。面白いなあ。お尻くん、またうんこもらしちゃったよ。むふふふ」

モリオはお尻くんを読み終え、さらにヒマだったので彼女にケータイで電話してみた。

「もしもし。ロリ華ですけど」

なんと、彼女とはロリ華であった。ロリ華は結婚していたのでは????

そう。実はロリ華は不倫をしていたのだ。

「モリオだよ。ロリ華ちゃん、何してたの」

「えへへへ。旦那が今ボクシングの合宿で留守だからね、松阪牛のサーロインよ」

「わあ。すごい。オレも食べに行っていていいかい」

「いいよ。まさし（赤ちゃん）見てってよ。すごくかわいいよ」

「仕事が終わったらすぐ行く」

モリオはケータイを閉じ、大きくのびをする。

「ちえっあの変態総理。早く帰ってこないかなあ」

その頃、ヤンは見回り中の警官に職務質問をされていた。さすがに警官も首相が下着泥棒をするとは思ってはず、ヤンはなかなか帰してもらえなかった。

下着泥棒はいけないことである。それは誰が何と言おうがいけないことである。犯罪者である。被害者の女性がビビって生活が困難になることを考えれば重要犯罪である。きんたまに針ぶっ刺し刑に処さなければならぬ。

しかし、一方で憐れみを感じてしまうのも事実だ。本当はその子

と付き合いの到下着を盗んでしまふとはあまりに悲しい。

新山たけおは、同級生の村田よしこのパンティを盗んでしまった。初犯である。あまりにあまりに好きで、しかし、よしこにはイケ面の彼氏がいて、ついやってしまった。

たけおは部屋に帰り、パンティを眺めながらえらいこととしてしまったと嘆く。犯罪者の仲間入りをしてしまった。

どうしよう。逮捕されるかもしれない。新聞や雑誌にも載るだろう。ワイドショーにも取り上げられる。

「あの真面目で温厚なたけおがなぜ！」

論壇でも評論家が論じるだろう。日本の闇とは。これから日本が取るべき道は。

たけおは想像して気持ち悪くなってきて、トイレで激しく嘔吐してしまった。どうしよう。今まで16年間、真面目に生きてきたのに。これが発覚すれば、進学も就職も無理。やくざになるしかない。

「たけちゃん。ごはんよー」

「食べたくない」

たけおはひとまず、パンティを何とかしないとイケないと思う。

証拠隠滅せねば。

燃やすか。しかし、もつたない。燃やしたくない。

たけおが頭がパニックになって、よしこのパンティをはいてしまった。もっこりしてる。

「な、なんか気持ちいい……」

変態誕生！

こうなると次にほしいのはブラである。どうするんだ。どうするんだ。

ここであきらめれば、輝かしい未来が待っている。

しかしブラを目指せば、暗い暗い人生へと転落する。

どうすればいいんだ！ブラめっちゃほしい！かぶりたい！

たけおは興奮して眠れない。

新山たけおの兄、宗一郎は、24歳で引きこもりをしていた。――

応大学を卒業し会社勤めを始めたのだが、退社してヒツキーになった。

宗一郎の趣味は、小説を書くことである。朝から晩まで（というより晩からの活動が多かったが）小説を書きまくっていた。

ネットの無料投稿サイトで書いていた。固定読者は35人ほどである。

宗一郎が得意とするジャンルはギャグ小説であった。もちろん、シリアスなのも書いていたが、ギャグ中心であった。

宗一郎は母親が作ってくれた牛丼を食べながらキーボードを叩く。

宗一郎はヒツキーを始めてから一万枚ほど書いている。

宗一郎のペンネームはごはんライスである。

宗一郎の父、慎太郎は、小説家であった。十万部ほど売れるベテラン作家であった。慎太郎もまたギャグを中心に書いている。

慎太郎は気分転換に原付にまたがり、近所のビデオボックスまで飛ばした。

ビデオボックスで、ハンバーガーを食べながら備え付けのPCで執筆する。某文芸誌で連載中の小説「ブラックコーヒー」を書いている。

5枚ほど書いたところでDVDを観る。

ビデオボックスの前にあるラーメン屋で、光山忠雄はバイトをしていた。彼は34歳である。なぜ34にもなつてバイトをしているかといえば、プロ作家を目指してるからである。

彼の趣味は釣りである。

休日、彼はプリン湾に来ていた。

ムッチを10匹ほど釣って帰った。今晚はムッチの塩焼きで一杯やる。

電話で友達の相田のりこを呼んだ。

二人で楽しく夕食した。

のりこはまだ24歳であるがベテラン小説家である。16歳でデビューしたのでかれこれ八年プロで食っている。

のりこは十万部作家で、何回か百万部をマークしたことがある。
貯金がいぶあるが、これは将来コメディ映画を撮影するために
使っていない。

のりこはビールを飲みながら、忠雄に言った。

「どう。忠ちゃん。小説書いてる？」

「それがねえ。バイトから帰るとくたくたですぐに寝てしまうので
なかなか書けないんだよ。のりちゃんは？」

「あたしは今月350枚、一冊分書いたよ」

「前のはいくらくらい売れたんだい」

「今のところ、64万部。百万は無理ねえ」

「無理かあ」

「忠ちゃんはサイトのアクセス数どうなったの」

「聞いて驚くなよ。固定アクセス数が30人から34人になったん
だ」

「すごい」

「えっへん」

「すてき。忠ちゃんの目輝いてる」

「てへへへ。照れるね」

「しゅん。あたしの目濁ってる」

「プロだから仕方ないさ」

ビール飲んでライター見て枝豆つまんで、こんな感じで夜は更け
ていく。

しかし、忠雄は困っていた。

バイトが忙しすぎるのである。小説が書けなくなり何のためにバ
イトをしてるのかわからない。

忙しいのは店が繁盛しいいことではないか、と友達言うが、み
なさん、知ってるでしょう。バイトというのは社員と比べ異常なほ
ど報酬が少ない。その上、社会保障もない。

小説が書けない以上はラーメン屋のバイトを本職にするかとたま
に思うが、こんな低賃金重労働、十年も二十年も続ける自信がない。

忠雄はあるとき、あまりに疲れ、死ねばラクになるかなと思い、ビルの屋上の鍵をぶち壊して屋上に出た。

飛び降りた。

忠雄はやはり、地獄に来てしまった。仕方がない。自殺は罪である。

鬼に任された仕事は、アマチュア作家の作品を読むことであつた。つまり、新人賞の予選審査。

正直、苦痛であつた。さすが地獄だなと思つた。つまらなすぎて、めまいがする。

しかし、読むのを休むと鬼に棍棒で叩かれる。やるしかない。

朝から晩までがんばって読む。そして、仕事が終わつたら地獄銭湯へ行き、地獄風呂に入つたあと、アパートに帰り寝る。その繰り返し。ちなみに、執筆は禁止だ。地獄である。作品をたくさん読んできるとアイデアがいろいろ湧いてくるというのに。ああ。自殺なんぞするんじゃないかった。

鬼は忠雄の苦しんでる姿を見てニヤニヤしていた。どえらいSヤローだ。

しかししかし、かかし、違う、しかし！

鬼には鬼の悩みがあつた。鬼の平八郎は、好きな子に「もっとMになつてよ」と言われるのだ。

実はこの子、S。平八郎もSなのでどうにもならないのである。

平八郎は何回も練習した。彼女のもやし子に、「殴ってみて」と言つたことがある。

殴られるとやっぱり腹が立ち、もやし子を殴つてしまう。当たり前だがもやし子もSなので殴られると不愉快になる。

そんなわけで平八郎は悩んでいるのだ。このままだと別れるかもしれない。実際、もやし子がM男子と浮気してるといふ噂も聞いたことがある。殺してやと思うが、そんなことをすれば、もやし子が怒るに決まつてる。「もっと浮気して！快感！」と思えるようなMがもやし子は好きなのだ。

好きといえば、すき焼きが食べたいなあ。ちょっと寒くなってきたからね。

すき焼きパーティーを、作者、大晦日に友達の家でしました。全部食い終わって闇なべをします。闇なべというのは、部屋を真っ暗にして各人が勝手なものを次々とぶちこみ、それを箸でつまんだら必ず食べないといけないという恐怖の鍋です。

去年は、むりおくんが、ミロを入れやがった。鍋全体がミロ一色。ぼくの入れた餅なんて見る影もなし。

ミロは反則だと思います。

ミロは悲しい少年であった。貧しいスラムで生まれた。

ミロの親父はアル中で毎日、ミロを殴った。

「ふん。ガキが。さつさと稼いでこい。酒が切れた」

ミロは少年専門の売春宿へ行った。ミロはまだ小学五年生だが働いている。毎晩、おっさんのちんこやきんたまをなめたり、尻の穴にちんこを入れられたりしている。

ミロはもういやになってしまふ。死にたい。

ミロは行為が終わったあと、窓の外の夜空を見上げる。

「神様。ぼくを助けてください」

返事はない。ミロはどうしていいかわからない。

ミロは、ある日、売春宿の支配人に怒られた。客の乳首をつつかりかんでしまったのだ。

「ミロくん！こんなことならもう解雇するよ！」

「ごめんなさい！ごめんなさい！しっかりやるので許してください！」

支配人はミロの顔を蹴飛ばした。

「うぎゃ」

床に転がるミロ。

「ふん。ガキなんて代わりはいくらでもいるんだ」
何という扱い。

まるで非正規労働者のようではないか！！！！

そんなミロの唯一の楽しみは、釣りであった。釣りをしているときはすべて忘れられる。おまけに、魚も食べられるので一石二鳥である。

いつも行く港に、なじみの釣り人がいる。モンジャミンさんだ。モンジャミンさんはでっぷりした赤ら顔のおじさんで、いつもチェックのシャツを着ている。歳のころ、55歳くらいだろうか。おじさんというより、おじいさんに近い。

モンジャミンさんは港の近くの喫茶店でマスターをしており、ミロはたまにタダでスパゲッティとかを食べさせてもらう。友達なのだ。

モンジャミンさんはわけあって独り暮らしである。まあ奥さんに逃げられたのであるが、この話をするとき300枚になる。「ブラック・コーヒー」でなく、「モンジャミン物語」になってしまう。

モンジャミンさんの趣味は釣りではなかった。釣りは実際に焼き魚を店を出しているので仕事の一環である。

モンジャミンさんの趣味は、「写真で一言」という遊びであった。どんな遊びかというと、ケータイ片手に町や山をぶらぶらし、ケータイで写真を撮り、おもしろコメントを添え、友達にメール送信するといったものだ。

例えば、モンジャミンさんが、町の寿司屋で何のヘンテツもない二貫の中トロを撮影する。その写真に……。

「よしこちゃん。結婚しよう!」

「ええっ本当に? たけしさん」

顔を赤らめる二人。

なんてコメントを添えるのだ。

モンジャミンさんはいつかこれで写真集を出すのが夢である。

ぶちえは「ミロ物語」を閉じた。ミロの話じゃなくてモンジャミンさんの話になってきて退屈になってきたからだ。

ぶちえは文庫をバッグにしまい、寝た。電車の中。今日も一日すごく疲れたぶちえである。休日には大好きなたけしに会えるので、てんでへっちゃらだが、やはり遠距離恋愛は少しつらい。そんなわけで、電車でも以前は本を読んでたけど、最近は寝てしまうことが多いわけだな。

電車の窓の外では、丸い月が「おつかれさん」とつぶやく。よい夢を。ぶちえちゃん。

ぶちえの家の前の公園でテントを張り暮らしていたのは竹下昇。非正規労働者、34歳である。

竹下は朝スーパー「スーパーちんかす」でバイトし、夜塾「ばか塾」でバイトしてる。

時給がスーパーが350円。塾が400円。一日13時間働いてもアパートが借りられない。だから公園で暮らしているのである。

竹下は正直疲弊していた。街で包丁を振り回して暴れようかなと考えている。

ある日、竹下は実行に移すことにした。

街に出て、カバンから包丁を取り出し振り回した。

「うわああああ」

「通り魔だあ」

「逃げろお」

みんな一生懸命に逃げる。

竹下は次々捕まえ、刺す刺す刺す！

実に気持ちがいい！

今まで自分は世間に低賃金でこき使われる奴隷の身であったが、初めて自由になれた！

竹下は人を刺しながら気持ちがよくてたまらない。やっと世間に復讐することができたのだ。

アスファルトに転がる死体。すでに25人くらいが死んでいる。今まで竹下を低賃金重労働で苦しめてきた悪いヤツらだ。

神は一向に天罰をくわえないので竹下が自らやるしかないのが情

けない。

神も仏もない！！

竹下はその後、逮捕され懲役一年となったが刑務所が満員のため、入れてもらえなかった。

しかし、職がない。バイトの面接を受けるには履歴書がいる。そこに。

東京大学法学部卒業

数年引きこもり

ばか塾にバイト雇用

スーパーちんかすにバイト雇用

通り魔（ばか塾・スーパーちんかす解雇）

最後のがいかん。ことごとく不採用となった。竹下は「通り魔なんかするんじゃないかな」と思う。

しばらくは無銭飲食や万引き、コンビニ強盗などをして生計を立てていたが、さすがにいつまでもこんな犯罪に近いバカなことをしてはいけない。

ある一家の家族を惨殺し、その家に勝手に住んでいたが、いつまでも他人の家に住んでいてはいけない。稼いで自分の家を建てないと。

ある日、書店で万引きした求人雑誌に最高な仕事載っていた。

小説株式会社

経験年齢不問（前科があってもよし）

業務内容・小説の執筆

月収・手取り78万円（各種社会保障完備）

2LDKとフェラーリを無料で提供（フェラーリは維持費込み）
年に五回、海外旅行あり

一日5時間労働

週休3日

夏に二ヶ月の長期休暇・冬に一ヶ月の長期休暇あり（その間は月額35万円を無償支給）

定員・256名

「これだ！オレは昔遊びで小説を書いていたことがある。これしかない！」

履歴書は入らないらしいので、電話したらその日に面接。

夜、合格の電話がきた。やったね、竹下。神はいた。

当たり前だが、小説株式会社はまもなくして倒産した。

元社長西山丸雄は、また一からスタートだ。公園にテントを張り、ひたすら小説を書く。

女房がパートに出てくれてるので、食っていける。ただアパートを借りるほどの所得がないので公園暮らしなのだ。電気などは近くの電線からばくってる。

丸雄は、女房と、銭湯に行った。珍しく混浴の銭湯である。

素っ裸の女が歩いてるので丸雄は興奮してしまう。

というより素っ裸の男も歩いてるので丸雄の女房も興奮してしまう。

「普通の銭湯がいいね」

「ね」

銭湯を出たあと、丸雄と女房は秘密映画館に行った。マンホールを開けて、下水道に出るとエレベーターがありどんどん下降していく。地下二十メートル地点に秘密映画館がある。ここでは、一般には上映できないような過激な映画、あるいはアマチュアが撮った映画などを上映している。

ブザーが鳴った。今回二人が選んだのは、「通り魔たけちゃん」。なるほど、題名からして一般向けではない。

果たして見終わったあと、二人はぐったりしてしまった。そりゃそうだ。小学生のたけちゃんが包丁を振り回し街で大暴れするのだ。

しかも、刑務所から脱走してまたやる。観てると吐き気がしてくる。二人はエレベーターで地上に上昇し、マンホールから出て徒歩で、24時間営業の図書館まで行く。ここは飲食しながら本が読めるのでみんなに人気だ。おまけに無料である。

丸雄と女房は座席に座り、思い思いの文庫を開きながら、食事をした。丸雄はスパゲッティ。女房はカレーライスを頼んだ。もちろん、無料である。

二人はそののち、図書館内にあるベッドに寝転び、朝まで寝た。図書館員にモーニングコールをもらうのも忘れずに。

深夜図書館（当たり前だが昼間は普通の図書館）の屋根裏に、キムチは住んでいた。キムチはバイトを一日8時間週5でしているが時給が420円のため、アパートに住めない。区に相談に行ったところ、図書館が新しく書庫専用家を建てるので、屋根裏の書庫を使わなくなるのでそこに住みなよと言われたってわけだ。

キムチはバイト以外はだいたい小説を書いていた。新人賞にも何回か応募しているが、なかなか合格しない。すでに10000枚ほど書いている。まあこういうのは才能もいるので、努力だけではどうにもならぬのだが。

ただキムチは、ひとまず小説を書くのが楽しくてたまらなかったのでいいのだ。

キムチは30枚ほど書き、気分転換に、散歩に行くことにした。

図書館の駐車場にヘリコプターが停めてある。キムチの自家用機だ。

キムチの兄、夏男は歌手をしていた。毎晩、街の居酒屋で歌っている。お客様にチップをもらったり、居酒屋の大將に料理をただで食べさせてもらっている。

今日も一日くたくた。夏男はアパートに帰り寝ようかなと思ったが、どうも目が冴える。散歩でもしようかなと思い、駐車場に停めてあったヘリコプターに乗った。夏男の自家用機だ。

キムチと夏男の兄、守男は、自衛隊の基地でジャズドラマーをし

ている。

「守男さん、今日どんな曲やるんですか」

「激しいやつやるぜ」

守男は仕事から帰り部屋に着くとあっという間に寝てしまう。

まったくドラミングというのは体力のいるもんだ。守男はくたただ。

しかし、すぐに電話がある。

「どうした」

「守男さん。雅夫たちが米兵にからまれてる。すぐ来てくれ」

まったく厄介な話である。自衛隊の基地のすぐ近くに米軍基地があるのだ。その中間にあるバーでよくケンカがある。

守男はめんどくさかったが、雅夫たちはかわいい弟分だ。見捨てるわけにはいかない。ジャンバーを着て車に乗り飛ばした。

車中、ナイスメロデイが頭に浮かんだ。やばい。むっちゃ録音したい。

しかし、雅夫たちを助けないと。

雅夫たちが米兵と乱闘してるところを発見し、守男は車から飛び降り、乱闘に加わる。

「ジャップ。ファツキュー」

「くそ外人。死ね」

乱闘してる間、守男の頭の中には新曲のメロデイが激しく響き渡っていた。

自然に踊ってしまう。踊りながら米兵を殴る。なんだか妙な感じだ。

+ 注意 +

・特に記載なき場合、掲載されている小説はすべてフィクションであり実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

・特に記載なき場合、掲載されている小説の著作権は作者にあります（一部作品除く）

・作者以外の方による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、行った場合、著作権法の違反となります。

第二部

大石県の県庁所在地パイナップル市の西部、ケチャップ町に、武田さとしは住んでいた。

さとしは、ある製薬会社に勤務している。

さとしは、そこで今「アイウエオX」という新薬を開発していた。どんな薬なのか？

それは秘密である。企業秘密なのである。

さとしは仕事を終え、居酒屋へ行った。

そのさとしの兄、武田のぼるは、パイナップル市の東部、醤油西町に住んでいた。

のぼるは、自衛官である。パイナップル市にあるパイナップル基地に勤務している。

のぼるは、ある日、上司に言われた。「のぼるくん。うちの娘と結婚しないか？」

のぼるとさとしはなかなか仲がいい兄弟だ。たまに、二人でミンジャリボンバーの試合を観に行く。のぼるは、大西プリンボーズの坂田ぶりお選手、さとしは、岸本ぱりすけ選手のファンだ。二人とも天才的モンジャリボンバープレイヤーである。

その坂田ぶりお選手がある日、交通事故で他界した。

坂田ぶりおの父やまひこは、ある午後、愛人のむねこの部屋にいた。まあこれは児童書であるからやらしいことはあまり書けないが、まあ楽しいことをしてたわけだ。

むねこには弟がいる。克典だ。34歳で非正規労働者をしている。あまりに低所得のため公園にテントを張り暮らしている。

克典はプロの小説家になりたい。バイトから帰ると寝ないで必死に書く。いまだ童貞であるが、これはプロ作家になるまで女禁止にしたので仕方ないことなのである。

とにかく、テントの中で毎日書き続けた。早く印税をもらいアパ

ートに住みたいなあと思う。結婚もしたい。

いつになることや。とにかく書く。書いてプロになれるとは限らない。しかし、当たり前であるが、書かなきゃプロになれない。

克典は、勤務先の塾の女子生徒に恋してしまった。まだ小学五年生である。名をロリ華という。あまりに童貞生活が長いのでちよいと頭がおかしくなっている。

気分をまぎらわすために克典は少し休みをもらい温泉へ行った。山がきれいである。温泉につかりながら、克典は次回作の構想を練る。料理もすばしかった。

ただ克典は低所得である。えらい贅沢である。テントに戻ったら生活苦しいな。でも、たまには発散しなきゃな。

克典はその夜、プロ作家になつてる夢を見た。編集者らしき人に竹刀でむちゃくちゃに叩かれている。

克典は汗びっしょりになって起き上がった。

冷蔵庫からコーラを取り出し飲んだ。

ああ。オレはプロになれるのかなあ。一生バイトなのかなあ。

毎日が不安である。高齢の非正規労働者などすでに企業にも政府にも見捨てられている。

しかし克典は前進しなければならない。何のために。人のために自分のために。

克典は机に原稿用紙を広げ書き始めた。月がほほえんでいる。

克典はふとこの旅館は夜中でも温泉を開けていることを思い出した。

30枚ほど書いた深夜の4時。克典は温泉場へ向かった。

温泉は本当に気持ちがいい。来てよかったなと思う。いやなことが忘れられる。

克典はふと華子のことを思い出す。華子というのはロリ華の母親だ。どうも塾の面談で克典を見て以来一目惚れをし、メアドを教えたら、メールをたまに送ってくる。ロリ華には父親がない。オレはロリ華の父親になってしまうのか。

色々考える。

克典は、部屋に戻り読書した。ハートフルコメディの傑作と言われる小説だ。正直、克典はダークユーモアが好きなのであまり面白くない。

しかし勉強のために色々読まなきゃいけない。

昼から観光したので朝の6時には寝た。

そして、腹の立つことばかりだ。悪いやつを見ると当然ムカつくし、いいやつを見てもその胡散臭さがムカつく。どっちでもないやつはつまらぬのでムカつく。何もかもムカつく。イラつく。

克典の住む公園の前に住んでいた北村達人は、怒りに満ちた高校一年生であった。

達人が、自宅で音楽を聴いていたとき、急に友達が遊びに来た。

「なんだよ」

「釣り行こうぜ」

「せっかく音楽聴いてたのに邪魔しやがって」

「え」

「このやろう!!」

達人は友達を殴った。友達はわけがわからず、わんわん泣いて帰った。

この達人の友達。名を、飯田賢治という。賢治は悲しい高校一年生だった。どこがどう悲しいのか。

それは内緒だね。プライバシーの侵害になるよ!!

賢治は、ある日、父親を失った。交通事故である。若すぎる死であった。

賢治の父親の勤務する会社に、久米清という上司がいた。

久米は、ゴルフが好きだった。だから休日になるとゴルフに行く。ただ、久米もまた死んでしまった。飛行機事故である。海外出張というわけで飛行機に乗ったら、運悪く墜落してしまったのだ。

久米には娘が二人いた。そのうちの一人、姉真理子も死んでしまった。交通事故である。

真理子の旦那、田村一郎も死んでしまった。交通事故である。ダンプカーにはねられてしまったのである。

一郎と真理子の娘、玉子は、悲しくて悲しくて泣いた。

しかし、その玉子もしばらくして死んだ。交通事故である。

その知らせを聞いた玉子の友人、早苗は、コンビニに買い物中、自爆テロに巻き込まれ死亡した。

早苗の通っていた大学で教授をしている、ミハエル・ミハエル教授は、ある日、下痢になった。

だから、その日、授業がやばい感じだった。

そのミハエル教授も、その後、川に流され死んでいる。

ミハエル教授の妻、ムニエルは熊に襲われ死んだ。

二人の息子、モバイルは、崖から落ちて死んだ。うっかりミスだった。

モバイルの隠した宝はいまだに誰にも発見されてないらしい。

ミハエル・ミハエル教授の恩師、ムハエル・モハエルは今年で106歳。大学は引退したが、研究は相変わらず続けている。

今、モハエルが研究してるのは、女子の乳首を引っ張って、その引っ張ったことによって派生したエネルギーをどう平和活用するか、という、要するにだいぶボケてきた。

先週も下着泥棒の現行犯で逮捕された。さびしいのだ。

モハエルは、今日も一人、部屋で研究、実験に励んでいる。

モハエルには弟子がいた。近所の小学生むさしくんだ。

「む、むさし。そのフラスコをとってくれ。ごほつごほつ」

「はい！先生！」

むさしはテンションが高いのでムハエルは疲れる。

しかし、むさしはなかなか見所のある若者だとムハエルは思っている。

二人は今、女子のお尻を叩くとどれだけ経済効果があるかを研究している。

むさしは実験台に同級生の美奈子を選んだ。

「よ、よし。叩くぞ」

「やだあ」

ばしん！

美奈子は正直、恥ずかしいし屈辱的なのでいやだ。ジジイにおケツを叩かれるなんて。

でも、むさしに惚れているので文句が言えないわけである。

美奈子の父の弟、靖男は34歳。非正規労働者だ。低所得なので結婚できず、いまだ童貞であり、アパートも借りられないので公園にテントを張り、暮らしている。

靖男はテントで小説を書いていた。プロの作家になりたいわけである。修行中だ。いまのところ、1万枚書いた。そろそろ新人賞に応募しようかなと考えている。

ただなかなか一步を踏み出せない。この十年で仕事の恐ろしさを知りすぎた。非正規労働は本当に地獄である。仕事は本当にきつい。社員はえらそうにふんぞり返って、非正規に命令するだけでいいからラクなものだが、非正規は一番下のため命令する相手がおらず、すべて一人で雑務をやらなければいけないのだ。動き回らないといけないのだ。しかも、社会人であっても学生アルバイトと賃金がまったく同じガキの小遣い程度。社員の持っている社会保障がまったくない。生活が本当に苦しい。

そういう仕事の苦しさを知ってしまったので、小説を仕事にするのが怖いのだ。趣味でやっていた方が楽しいのではないかと思うのだ。

しかし、正直、非正規労働の賃金の安さがきつい。テント生活はきつい。アパートに住みたい。妻子が欲しい。印税が欲しい。

そんなわけでプロ作家を考えているわけである。

靖男は執筆に疲れると、ギターを弾いて叫ぶ。しかし、公園でやっていると、近所の人から文句が来る。かといえ、低所得なので、防音がばっちりの録音スタジオを借りることはできない。だから、高

速道路の下でやる。誰も聴いてる人などいないが、ストレス発散なので別にいいのだ。

やはり、もう一つ厄介なのはセックスの問題である。靖男もまだ若いから性欲はすごくある。

しかし、低所得のため、風俗にいけないし、もちろん結婚なんて夢のそのまた夢。

そのため、オナニーばかりしているが、毎回同じやり方だと飽きる。

靖男は、大人の女性を想像してオナニーするのは飽きたので、女子小学生を想像してオナニーすることにした。その女子小学生とは、兄の娘、美奈子だ。

草村晋はそんな靖男の大学時代の友達である。今は靖男と交流がない。

晋は今、ちびっこポルノを仕事としている。

ちびっこポルノとは小学生がセックスしたりフェラチオしたりする映画である。無論、一般的な映画館では上映されていないし、インターネットでも流されていない。全国に何カ所がある秘密映画館で上映されているのである。

例えば、ここプリン市にも秘密映画館はあった。

二丁目のパイナップル公園の脇にボックスがあり、そのドアを開けると、エレベーターになっている。

そのエレベーターで急降下し、地下九階に秘密映画館がある。そこで、ちびっこポルノを上映している。

正直これは児童書なので映画の詳しい内容は書けません。ごめんなさい。

ところで、晋は、なぜちびっこポルノ業界に足を踏み入れたのであろうか。正直やばい仕事である。警察に見つかれば逮捕される。もっともな職に就いた方がいいのではないか。

ともかく、晋は日々仕事をがんばっている。

そんな晋は休日になると普通の映画を観に行く。趣味半仕事半である。

スリルに満ちたハリウッド映画から情緒たっぷりの日本映画まで、とにかくいろいろ観る。

今日も女優のロリ華と観に来ている。ロリ華は小学五年生である。まわりには親子だと思われるだろう。

「晋さん。ああいうシーンもちびっこポルノに取り入れたいねえ」
「そうだねえ。ただ予算が」

ロリ華はなかなか研究熱心だ。

二人は映画館を出たあと、レストランで食事した。

「やっぱりあれ、ラストがいい。ムリゴンダーラがマシンガンで撃たれたあと。もぐもぐ」

「ああ。あれはすごい。衝撃だった。むしゃむしゃ」

「ああいうのをちびっこポルノでやりたいわねえ。もぐもぐ」

「そうだねえ。しかし予算が。むしゃむしゃ」

草村晋の住んでるアパートの前にある公園に山岡次郎がテントを張り暮らしていた。

「ねこ鍋できたよー」

「わー旨そう」

世界で貧富の差は広がる一方だ。しかし、先進国の中でさえ広がっている。山岡は朝スーパーで夜塾でバイトしているが、時給が安すぎてアパートに住めない。もう34歳である。将来が不安だ。政府からの援助も企業からの援助もまったくない。

「たまちゃーん。たまちゃーん。どこ行ったのー。たまちゃーん」

そんな山岡の唯一の楽しみは小説を書くことだ。小説を書いている間はつらい現実を忘れることができる。現実では何もできないけど、小説では何でもできる。美人とキスすることもできる。

ねこ鍋を食べたあと、テントに戻り寝る。夜からの塾バイトに備える。

夢の中で十年以上も前に好きだった女の子が出てくる。

まあエッチなこともしてるので詳しくは書けないが。

女の子の名前は河野萌といった。

河野萌は今、とある県のとある工場に社員として勤務している。

「アキさーん。今日晚めし食べに行つていい？」

「またかよ！」

河野萌の住むアパートの前にある大村公園に、佐々木光男はテントを張り暮らしている。佐々木は非正規労働者のため、低所得すぎてアパートを借りることができないのだ。

佐々木はもう34歳である。いったいどうなることやら。しかも、童貞である。結婚なんてファンタジーの世界の話である。

「もう世間の犠牲になるのはごめんだ！」

佐々木は、ある休日、街へ出た。

前を歩いていた老婆に突進し、包丁で背中を刺した。

「ろヴおえ9 v g r 8 9 r v g 5 t 5 t 5 ^ - - h t」

老婆はうつ伏せに倒れ、佐々木は馬乗りになり、さらに何回も何回も執拗に老婆の背中を刺す刺す刺す！

「世間め！世間め！世間め！」

返り血を浴びる佐々木。

その後、3人ほど殺し、パトカーが来て逮捕された。しばらくして、佐々木の死刑が確定した。

南田の師匠、北山達郎は、すでに78歳である。マンガはまだ描いてはいるが、すでに月刊や週刊のペースには乗れず、たまに描き下ろしを描く程度。

達郎の孫、泰は、大学でマリバーゴリマン部に所属していた。

泰は大学に入って初めて、マリバーゴリマンを知った。それ以前はどういうものか知らなかった。

作者、いまだにわからぬが。

さて、泰のことはどうでもいい。たけしとぶちえの仲はどうなったんだ（もうみんな忘れてたたる）

ぶちえはたまにたけしのアパートに遊びに行く。遠距離恋愛なの

で本当にたまにだけど。

「たけしくん。今晚なにがいい？」

「オレ、ハンバーグがいいなあ」

二人はなかなか上手くいつてるようだ。

たけしの部屋の隣に間進^{あいたすすむ}が住んでいた。

進は漫画家をしている。とはいっても売れない漫画家だけど。

進はひと仕事終え、原付にまたがり銭湯に向かった。

途中、梨村公園の前を通る。この公園に春田治雄がテントを張り生活していた。

治雄は非正規労働者である。低所得すぎてアパートが借りられないのだ。

テントの中で小説を書いていた。新人賞に投稿するための作品を書いていた。

書いては丸め、書いては丸め、治雄は疲れてきたのでテントから出て原付にまたがり銭湯へ向かった。

梨村公園の前にあるマンションに住んでいる山下三郎という青年。彼は正社員ではあるが小説も書いてる。プロデビューして五年。今のところ、八冊出している。

最新稿をファックスしたあと、車に乗り銭湯へ向かった。

三郎の隣に住んでいる清村健太。彼は外務省に勤務している。小説も書いており、プロデビューして二年。すでに三冊出している。

連載の原稿をファックスしたあと、自転車にまたがり銭湯へ向かった。

途中、大沼公園の前を通った。大沼公園にテントを張り暮らしていたのは岸田太郎。34歳。非正規労働者、童貞である。彼は小説家を目指していた。

一本書いたあと、原付に乗って銭湯に向かった。

ざあああああああ。

夜、梨村公園の西にあるアパートに住んでる新田きよしはケータイで彼女に電話した。

「今、こっちに来られる？」

「ごめん。雨だから」

「ざあああああああ。仕方ないか。雨だものな」

「きよしはあきらめ、チキンラーメンを食べた。」

「ああ。生卵入れたいなあ」

「給料日前ゆえにそういう贅沢ができない。」

「ざあああああああ。」

「きよしはチキンラーメンを食べたあと、ベッドに寝転がった。う」

「つぶせになり、雑誌を眺める。」

「ざあああああああ。」

老舗文芸誌「月刊ポンチョ」。これに連載されている小説「まなみ」が、きよしは大好きだ。ヒロインまなみは小学生。ちびっこ売春婦をしている。

「ざあああああああ。」

「きよしはズボンを脱いだ。ティッシュを用意した。」

「ざあああああああ。」

梨村公園から少し歩くと、スーパーがある。あまりに万引きが多い。先週、米が盗まれた。まだこの地区はましな方だ。ほかのやばい地区になると万引き被害が何千万にものぼり、閉店してしまうところもあるという。

万引きをまったく無くすのは無理だ。これは無理。悪いやつってのはいつの時代でもある。今無くなっても、将来また出てくる。それが人間。ロボットじゃないので悪いことを繰り返す。

しかし、減らすことはできる。少なくとも閉店にならん程度の万引き被害に抑えることはできる。

一つは倫理観の強化である。おそらく戦後から倫理観というのは解体の方向に向かっている。アメリカ型の自由が輸入され、倫理などどうでもいい自由にやりやそれでいいという風潮が世を支配している。

例えば、テレビで観たワンシーン。しょうもない安い商品を万引

きしたじじいが事務所に連れていかれ、そのとき言った一言。

「そんなきつく言われたらこっちが悪いことしたみたいじゃないか！それにそう大して高いものを盗んだわけじゃないでしょう！何でそんなきつい言い方するんですか！！」

すでにじじいの中に「万引きは悪である」という倫理観はない。

ただ万引きの自由だけが脳内にある。

これを何とかする。

一番の方法は、こういうじじいを死刑にするという制度を作る。

万引きくらいで死刑なんてひどいよという人は甘い。万引きで店が倒産して自殺する店長もあるわけだから、死で償うのは当然なのだ。あるいはこういうパターンもある。外国人労働者とかあまりに賃金が安すぎて子どもを食わすことができずに万引きしてしまうというパターン。

これなんかさらに簡単だ。労働者の賃金を上げ、社会保障の完備をすれば一気に解決する。そもそもこういうパターンはさっきのじじいみたいに遊びでやってるわけではなく、単に貧困からやるパターンなので貧困を解決すれば簡単に収まる。じじいの倫理観を正すのは精神的な問題なのでなかなか難しいが、こっちは社会保障的な問題なので、実に簡単である。

しかし、実際には貧困はなかなか無くならない。なぜだ。なぜ企業は労働者に社会保障をしないんだろう。賃上げしないんだろう。すれば万引きが減るのに。ほかの犯罪も減ると思う。なのに、まったく企業は非正規労働者に社会保障をしないし、政府も非正規労働者に援助をしない。疑問である。政府や企業は犯罪が増えるのを望んでいるのだろうか。何のために。そんなことして誰が得するんだ。さっぱりわからない。日本の七不思議の一つである。

梨村公園の東を少し歩いたところに、木村幹夫の家がある。

幹夫は小学五年生。成績もまあまあ。スポーツもまあまあ。性格もまあまあ。顔もまあまあ。要するに普通の男子であった。

学校では、ね。

ただ、幹夫には悪い癖があった。いわゆる下着泥棒である。ベランダに干してあるパンツやブラを見るとつい盗みたくなくなってしまふのだ。

幹夫は、夜中になると家を出る。たまにOLとかが夜中に干してることがある。

幹夫は、近くのアパートの一階のベランダに干してあったブラジャーを一枚盗んだ。ポケットに入れ走る。

幹夫は自分でもこのままじゃいけないと思う。オレはいったい何をしているのだと。

しかし、どうしてもやってしまう。

幹夫はやばいと直観し、学校を少し休み、山寺に修行に行った。滝に打たれる幹夫。

「ブラはだめ。ブラはだめ。ブラはだめ」

呪文のように唱えながら滝に打たれる。

少ししてから滝から出ると、小坊主の珍念が、焚き火をし魚を焼いている。

「幹夫くん。焼けたよ」

「わーおいしそう」

二人で焼き魚を食べる。すごくおいしい。

「ところで幹夫くんはなぜうちに修行にきたの」

「下着泥棒を直すためさ。珍くんなぜ寺で修行してるの？」

「ぼくも下着泥棒を直すためさ。なかなか直らなくてね、母上に入れたの」

「そっかあ」

二人は夕方まで語り合った。

そのころ、和尚さんは、あの二人なにやつやがんだ晩飯のしたくをさばって、とめちや激怒していた。

梨村公園の北に、安田政夫の家がある。

政夫は中学二年生。友達には「まっちゃん」とか「まさちゃん」とか呼ばれている。

政夫は今、バイオレンスゲームにはまってる。主人公たけちゃん が包丁で次々と街ゆく人を刺していくのだ。政夫はストレスがたまるとこのゲームをやる。

政夫は、また銭湯も好きだ。自転車に乗ってたまに行く。

政夫は銭湯でばったり同級生の相馬孝に会った。

「相馬。お前、珍しいやん」

「家の風呂が壊れちゃったんだよ。まっちゃん」

二人は湯船に浸かる。

「あー極楽極楽」

「じじいみたいだな」

「ふい」

サウナにも入る。

相馬孝の兄吉信は、ケチャップ高校の二年生。新聞部に所属している。

吉信には悩みがあった。最近、下着泥棒をしてしまった。

吉信はカレーライスが好きだ。ただ、あまり辛いのはだめだ。

吉信は、ある日、街でばったり中学時代の同級生に会った。

「久しぶりだな。よっしー」

「銭湯でも行くか？」

「いいね」

二人は歩いて銭湯へ向かった。

梨村公園の南を少し歩いたところにパン屋「小麦粉野郎」がある。すんげえ旨いパンを売ってる。

このパン屋の主人、米田飯太郎は（ややこしいね）大のパチンコ好き。仕事が終わるとすぐにパチンコへ行く。

パチンコをしながら、新作パンのアイデアを練る。

じゃらじゃらじゃらじゃら。

「ううむ。キムチパン。焼き肉とキムチをパンに。ううむ。松阪牛

使いたいなあ。しかし予算が。むむむ」

後ろから声がする。

「米ちゃん」

「おっ王さん」

ラーメン屋の大将、王さんだ。彼もパチンコ大好き。

「出てるねえ」

王さんも台に座り、パチンコをやりながら新作ラーメンを考える。じゃらじゃらじゃらじゃら。

「むう。ブロッコリーラーメン。ブロッコリーをたっぷり入れるある。だめあるかなあ」

「ううむ。キムチあんパン。あんことキムチを。斬新だぞ。ううむ。しかし少し気持ち悪いか。むむむ」

「クリームラーメン。たっぷり生クリームを入れるある。ううむ。吐きそうある。ろくなアイデア出ないある」

じゃらじゃらじゃらじゃら。

パン屋「小麦粉野郎」の隣のアパート「ぶるるん荘」の二階に滝本もちひこは住んでいた。

もちひこはエロ漫画家であった。日々、エロい漫画を描いている。もちひこは原付に股がり銭湯へ向かった。

途中、三好公園の前を通る。

三好公園にテントを張って暮らしていたのが、村田謙介。彼は非正規労働者であった。低所得過ぎてアパートが借りられないのだ。すでに34歳である。村田はあまりに低所得過ぎて歪んだ考えをしていた。例えば。

お客様は神様だというのは大嘘だ。社員にとってはそうかもしれないが、我々非正規労働者にとっては鬼か悪魔である。

なぜお客様は我々非正規労働者がこんなにも低賃金重労働で苦しんでいるというのに平気でいられるんだ。正直、ぶち殺したい。お客様は人間の心を失っている。自分らの欲望のためなら非正規労働者の生存権などどうでもいいと思っている。悪魔に心を売ってしまった

った。

なぜお客様は適正価格を払おうとしないのだろう。わからない。なぜ低価格か無料を求めるのである。お客様が低価格か無料を求めれば、労働者は低賃金重労働をせざるをえない。なぜお客様は労働者の報酬を上げることに反対するのだ。なぜお客様は労働者の仕事をラクにすることに反対するのだ。

労働者の仕事をラクにしたり、労働者の賃金を上げれば、サービスがよくなりお客様が得をするのに、そんな簡単なこともわからないのか。

とにかく、もう労働者が自殺するのは見たくない。

これ以上、お客様の犠牲になるのはまっぴらごめんだ。

生きたい。

こんな感じのことを村田はつい考えてしまうのである。無論、間違った考えである。お客様が商品を買ってくれるおかげで労働者は賃金をもらえるのである。

しかし、では、労働者が公園に住んでいる、このことはどう考えればいいんだ。これは間違ったことではないか。お客様が幸せなら、労働者が公園暮らしでも構わないのか？

作者はそうは思わない。世間の意見と逆である。世間は非正規など公園に暮らしておけばいいと考えているが、作者は非正規でもアパートに住む権利はあると思う。

作者の考えは少数派なので、作者は世間からクレイジーと言われているが、作者は、オレが正しい、オレしかまともなやつは今日日本にいないと考えている。

事実そうなのである。現在、この国は狂ってる。

村田の隣のテントに暮らしていた勝村忠雄。彼も非正規労働者であった。忠雄も34歳。彼は村田と違い、お客様に感謝していた。ごはんが食べられるだけでも素晴らしいと考えていた。お客様のお

かげだと思っていた。

まあ忠雄がそうでも作者はお客様を許さないが、忠雄の意見は尊重しよう。

忠雄は原付に乗り銭湯へ向かった。

忠雄の兄栗助は正社員であった。月に45万円もらっている。忠雄と全然違う。

新田公園の前に豪邸を建てている。

栗助はしかし車の免許がなかった。不器用なので何回試験を受けても落ちてしまうのだ。

栗助は原付にまたがり銭湯へ向かった。

梨村公園の近くに寿司屋「まぐろ野郎」があった。

この大将、大和田まぐ太郎は競馬が大好きだった。休日になると必ず競馬場へ行く。

「いけいけいけー！」

結局、全部外れた。

「チキショーつまないな」

まぐ太郎は競馬場を出たあと、気分転換するため、原付にまたがり銭湯へ向かった。

途中、西キムチ公園の前を通る。

西キムチ公園にテントを張って暮らしていたのが、西谷次郎太。

34歳。非正規労働者であった。

次郎太はホームレス仲間とねこ鍋をつついていた。

「たまちゃーん。たまちゃーん」

おばはんが飼い猫を探してるけど、すでに鍋になってる。

「あーお腹いっぱい」

「じろちゃん。銭湯行こうか」

「いいね」

次郎太とホームレス仲間たちは、原付にまたがり銭湯へ向かった。梨村公園から50メートルくらい歩くと、津村健吾朗の住むアパートがある。

健吾朗は、去年まで梨村公園でテントを張り暮らしていた。去年まで非正規労働者だったのだ。

しかし、今年から正社員になったので、やっとアパートを借りることができた。

健吾朗は、原付にまたがり銭湯へ向かった。

健吾朗の住むアパートを南に50メートル歩いたところに、笹田隆の住むアパートがある。隆には居候がいる。大家さんには内緒である。戸田治である。戸田は非正規労働者だった。34歳である。アパートを借りるだけの経済力がないので、大学時代の友人であるところの隆のところに居候しているのである。

隆と治は、原付にまたがり銭湯へ向かった。

その途中、飯田山公園の前を通る。

飯田山公園内にテントを張り生活していたのが、吉田健児。34歳、非正規労働者である。所得が少なすぎてアパートを借りることができない。

健児はバイトの時間以外は、小説を書いていた。

健児は、テントの中で書きながら、早く結婚したいなあと思う。印税ががっばり入れば結婚することができる。とにかく、いつまでもアルバイトではいけない。

アルバイトは男子一生の仕事ではない。とにかく、賃金が安すぎる。

健児は原付にまたがり銭湯に向かった。

西村公園にテントを張って生活していたのが、佐野治夫。非正規労働者で、34歳である。

佐野は、いぬ鍋をつつきながら、葛藤していた。

勤務先のスーパーで店長は口を酸っぱくして言う。

「お客様に感謝しろ。お客様が商品を買ってくださるから我々が生活できるんだ」

確かに。このいぬ鍋にしたって、いぬは無料として、野菜やスー
プの素はお金がないと買えない。

しかし、「我々正社員が」と言い直してほしいと思う。

じゃあ、なんでオレ、アパート借りられないんだよ。

それはお客様が低価格を求めるからである。お客様が適正価格を
支払い商品を買えば、我々非正規労働者はアパートに住めるはずな
のである。

どっちが正しいかといえばどっちも正しい。だから、佐野は葛藤
するのである。人間は食わなきゃ生きていけない。

しかし、食うためだけに生きてるわけではない。住む家も服も必
要なのである。

佐々木公園内にテントを張り暮らしていたのは、村田政子。34
歳。非正規労働者である。

政子は低所得過ぎてアパートを借りられない。小説を書いている
が、こちらはなかなか厳しい世界で、なかなかプロになることが
できない。

ただ政子は魔法使いであった。だから、例えば、ねこ肉を牛肉に
したり、いぬ肉を豚肉にしたりとかそういう技があったので、食う
には困らなかった。石を野菜に変えることもできる。

政子は給料日だったので、原付にまたがり銭湯へ向かった。ホウ
キを使えばひとつ飛びだが、魔法はエネルギーを使うので、原付で
行った。普段はドラム缶を風呂代わりにしている。給料日になると
ちよつと贅沢をするのだ。

その途中、野田公園の前を通った。

野田公園には、マッキンジャー・バリモンが住んでいた。彼はモ
ンバリ人で、非正規労働者、34歳である。外国人労働者はあまり
に賃金が安いのでアパートを借りることができず、こうしてテント
を張って暮らしている。

バリモンの故郷モンバリ共和国は今、ボイン派とオッパイ派に分
かれ紛争していた。

胸はでかい方がいいと主張するボイン派。

胸は小さくても形がいいのがいいと主張するオツパイ派。

両派は譲歩しない。いがみ合うだけだ。十年もドンパチやっている。

それにうんざりしてバリモンは日本に逃げた。

しかし、日本でも低賃金重労働という地獄が待っていた。

日本で平和なのは正社員だけだということがわかった。

バリモンは、原付にまたがり銭湯に向かった。

野田町あたりをオレは走っていた。かなり走って疲れてきた。野田公園の前にある自販機を爆破し、缶ジュースをゲットしてごくごく一気に飲む。途中でむせてムカついたので空き缶をばあの頭にぶつける。「痛い！」

野田公園に住んでいる外人に注意されたが、ぶん殴って逃げた。

オレは力を蓄えようと思い、木の下に寝転ぶ。すぐに眠ってしまった。

しばらくして股間がむずむずする。

目を開けたら、おっさんが触っていた。ホモか。

オレはおっさんの頭をハンマーで叩いた。

「ぐげ」

目ん玉が飛び出し倒れる。死体を火で燃やした。

オレは再び寝転び目を閉じる。

また股間がむずむずする。

起きると股間の上でかたつむりが数匹踊っていた。

オレは一緒になって踊った。すると、かたつむりが笑うのでムカついた。

踏んづけた。

潰れたかたつむりをフライパンで焼いて食う。なかなか旨い。

腹がいっぱいになった。オレはまた寝た。

目が覚めると、オレは素っ裸になっており、オタクたちがばしゃ

ばしゃ写真を撮っている。

オレはムカついた。オタクたちを一行に並ばせ端から順番にビンタしていった。

「痛い！」

「いやん！」

「ぱぴぷぺぽ！」

オタクたちを全員火で燃やした。木もついでに燃えた。おまわりさんが数人やって来る。オレはあわてて逃げた。

走る。走る。どんどん走る。

人ん家の庭だろうとどこだろうと走る。道なんて関係ねえ。走りたいところを走る。

なんてノリが間違っていた。トラックにはねられる。全身打撲だ。それでも走る。走らないとゴールしない。

いつの間にか夜になっていた。真っ暗で何も見えない。田舎なので電気がない。月も雲に隠れてる。

案の定、オレは肥溜めに落ちた。

全身くそだらけのオレ。臭い。臭すぎる。それでも走る。

前方に明かりが見える。しめた。民家か。オレは身体を洗わせてもらおうと、明かりに向かって走った。

すると明かりが逃げる。

「????」

またオレが明かりに向かって走ると明かりが逃げる。何なんだ一体。

明かりの正体は、ホタルであつた。オレはホタルを捕まえた。

「いやん。痛くないで」

か、かわいい。ごくりと唾を飲み込む。

「乱暴しないで。お願い」

オレはホタルの服を引き裂き、ブラとパンティをひっぺがした。

これは児童書なのでこれ以上書けません。

野田公園の前に住んでいたのが、玉井金助。通称たまきん。プリン小に通う中学二年だ。

たまきんには好きな女子がいた。ルーチカという。目が大きくて赤いほっぺたが特徴的なかわいい女子だ。

「ルーチカちゃん。いっしょに映画行こう」

「いいよ」

ルーチカは基本的に誘われたら断らないタイプ。別にたまきんのが好きとかそういうわけではない。

しかし、たまきんは、当たり前だが、ルーチカの隣にいるときどきどきどきどきどき。

「金助くん！」

「え」

なんとアイスクリームを股間にこぼしてしまった。

ルーチカがあわててハンカチでたまきんの股間をふく。

もっこりしてるのがばれませんように！

「金助くん。なんかふくらんでる」

バレバレ！

金助は恥ずかしい。

顔を赤らめていたら、ブザーが鳴った。今日観るのは恋愛映画である。

「あっキスした。ぶちゅってやった」

「金助くん、静かに観ようよ」

金助の隣に住んでいた大沼一郎の嘆き。

週5で一日八時間働き、たったの13万円！バイトの悲しい現実！絶望的である。この世の地獄である。これでは一生結婚できない。しかも、無料投稿サイトの収入はゼロ。どうにもならない。せめて、一作につき100万円ほどの印税が入れば、何とか生活できるのだが（アクセス一万として、一人100円を作家に払うだけではない）

た　だなかなかそういう都合のいいシステムにはならない。無料だから読むパターンがほとんどだから。ケータイ小説の有料化を企画したページも開いてみたが微々たる金額で、百万には程遠い。

書籍しか道はないが書籍はハードルが高い。なかなか難しい。

どうにもならない。ため息が出る。

ノーパソが欲しい。マイPCがないのがきつい。親父のPCは親父が寝ている間は使えないし、ケータイはこつつ打つのに時間がかかる。

バイトを一日13時間労働にすれば買える。ただ、そんなことができるのは若いうちだけだ。今は無理だ。身体と心が壊れる。

今の所得だと生活費で全額ブツ飛び、貯金なんかできない。

原稿用紙に書き、新人賞に応募し、その賞金でノーパソを買うという手もある。

しかし、今は、ワープロ原稿限定の賞がけっこうある。原稿用紙に書く人はあまりおらんだろう。実際、わしもPCの方が速い。

どうにもならない。絶望的。この世の終わりである。世界は終わった。暗黒時代の到来だ。

ほんまに銀行強盗でもしようかなあと真剣に悩む。しかし、やれば死刑になり書けなくなる。

とはいえ、銀行強盗でもせねば、執筆活動が活発化しない。

二律背反。

まあ嘆いていても仕方ないので、昼間に親父のPCを使い、あとはケータイで書いたり、原稿用紙に書いたり地道にこつこつとやっていくしかない。それしかない。一作一作心を込めて丁寧を書く。それだけ。

ああ力ネほしいなあ。何でこんな貧乏なんだ。困る。政府はなぜ困ってる人を援助しない。企業は労働者に嫌がらせをする。世間の人々は自分の幸せのみを追求する。

まったく理解できない。狂ってる。狂乱社会である。

原爆を百発ほど落としたい。みんな不幸なら文句ない。

そんなことを大沼は考えていた。

野田公園の南に大田信二は父親と住んでいた。

「お前の父ちゃん、料理うまいよなあ。この前、遠足のときの弁当、最高だったぜ」

「まあ、母さんを早いうちに亡くしたからねえ」

「飯食いに行つていい？」

「おお。来いや。親父も喜ぶよ」

そんなわけで、今、オレは西本の家に来ている。西本の父ちゃんがキッチンでいろいろやつている。

「ああ。いいにおいだなあ。早く食べたいなあ」

「まあ待てよ。おいしい料理は時間がかかるものさ」

「腹へったなあ」

ついに料理が出た。

「うまい！最高だよ、親父さん！」

「そうかい。へへへ。いっぱい食べな」

「うん！」

実に楽しい夕食だった。

野田公園を10メートルほど歩いたところに大石潔は住んでいる。大石潔は、数年の引きこもり、十年間のバイト生活を経て、新人賞をとり、プロ作家生活に入った。

妻に「ちよつと行つて来るよ」と言い、原付にまたがり銭湯へ向かった。現在「月刊マツチョ」に連載中の「天ぷらくん」がなかなか進まないで、気分転換だ。

書店に寄る。

文芸コーナーに大石の長編「マツチョドッグ・スクランブルエッグ」が平積みされている。これは大石にしては相当売れた。今のところ累計で40万部売れており、現在も売れ続けている。久々のヒットだ。

マッドを手にとりレジへ持つていく女子高校生の背中に両手を合わせてお辞儀した。

大石はどかんに入った印税で、コント撮影をした。カメラマンや素人を募集して低予算で、コメディ映画「スタマック・クラッシュ」を制作、上映。

これがまたしても大ヒット。

大石はマンガを一冊買って書店を出て、原付にまたがり、また飛ばした。

野田公園の前に住んでいた亀山喜太郎の話をせねばならない。彼は、ある会社に勤めていた。部長だった。

そして、彼は下着泥棒という裏の顔を持っていた。まだ逮捕されていない。八月の時点では。

九月に逮捕された。盗んだパンツの数1300枚。盗んだブラの数3900枚。日本史上最悪の下着泥棒であった。

のちに内閣総理大臣下着泥棒賞を受賞している。

亀田は78歳に死んだ。

その亀田と直接は関係ない岸田信彦という男がいる。彼は、ある会社に勤務していた。趣味はボーリングだった。

彼は98歳まで生きた。

まだまだ紹介したい人物は山ほどいる。たとえば、大和田信輝という男がいる。彼の趣味はスイカ割りだった。

スイカを食うのも好きだった。

だから、夏が大好きである。とはいっても、別に冬が嫌いというわけでもなかった。冬は冬で鍋が好きなので好きだった。

野田公園南のアパートの一階に西山きたおは住んでいた。西山きたおは、ごっついマッチョ。むつきむきの筋肉マンであった。

しかもロリコンで小学校の教師である。実に危険！

ただまあきたおは社会人であったので教え子を犯すのは頭の中だけであった。

「ううイキそう。うう」

「ペロペロ。先生のちんぽおいしいな」

てなことを頭でやってるわけである。小学生がちんぽなんて言う

か！

ただそんなわけで、きたおは34歳になるというのに結婚できない。そりゃあ、する気がないからね。

きたおは、ある日、便所で、かわいい生徒を想像しながらしゃべっていた。

「梨香ちゃん。梨香ちゃん。梨香ちゃん」

何ときたおは気づいていなかったが、きたおは盗撮されていた。生徒たちのいたずらだ。

「筋肉マンのしこしこ日記」と題してネットでDVDまで発売されている。誰が買うんだ。

そのDVDを購入した筋肉マニアの早苗（中学二年生）はきたおに一目惚れしてしまった。

しかし、禁断の恋である。危険すぎる。もし付き合ったりしたら、親に反対されるであろう。

西田川みしおは、無料小説投稿サイトで小説を書いていた。彼は非正規労働者で時給が520円のため、アパートを借りることができず、野田公園にテントを張って生活している。サイトはPCも対応しているが、西田川みしおはPCがないため、ケータイで執筆している。

西田川は、サイトで、村山田のみこと交流していた。のみこは売春婦をしている。しかし、のみこはまだ小学生のちびっこ売春婦のため、一回のまんこ料がたったの千円である（ちびっこ売春法でフェラは五百円、まんこは千円と決まっている）。まったく稼げない両親は交通事故で死んでる。児童保護施設は不況で赤ん坊を捨てる人が多く満員。そんなわけで、のみこは橋の下で段ボールで家を作り住んでいた。のみこもケータイで執筆している。

西田川は、のみこに恋してる。とはいえ、のみこと会ってセックスしようとは思わない。西田川は児童とはセックスしない主義だ。だから、メッセージのやりとりでエッチをする。いわゆる、メッセ・エッチだ。

西田川は彼女がいないので大助かりだ。ただで又くことができる。サイトに大感謝である。

西田川は、のみこの小説が大好きだった。のみこも、西田川の小説が大好きだった。二人はお互いの小説を読むとき、デート気分である。

正直二人はつらい日々だ。のみこは毎日おっさんのちんこの相手させられ、西田川は安い報酬で過酷な労働。サイトが唯一の救いであつた。

しかし、ついに大事件が勃発した。サイトが有料化することになってしまったのだ。

サイトの作家たちが結束して、小説に課金する制度を作ってしまったのだ。

のみこも西田川も最初は小説が収入になるので嬉しかった。しかし、読むのにも力ネがかかるわけである。別に二人は力ネのために小説を書いているわけでない。二人で愛し合うためだけに書いていた。だから、結局あまり意味がないなあと思う。

しかも、たちの悪いことにのみこの小説はアクセスが多い。つまり、すぐく儲ける。しかし、西田川はアクセスが少ないのであまり儲からない。所得格差が開くばかり。

ついに西田川は、のみこの小説を読めなくなってしまった。月の小説の収入が350円、支出が470円になってしまったのだ。のみこは小説収入が1800円で支出が450円なので大丈夫。しかし、西田川はついにサイトを利用することさえできなくなってしまった。

野田公園の南を少し歩いたとこのアパートに康子と則夫と子どもが住んでいた。

康子が急に家を出ていくという。急に。

「なんで。なんでだよ」

「もう則夫ちゃんといっしょにいるの疲れたの」

康子は子どもを連れて家を出ていってしまった。

オレは悲しみのあまり、酒の量が増えた。

「ういゝひつくひく」

「則ちゃん。やめなよ。身体に悪いよ」

「うるへゝ大将。酒だ酒」

「んもう」

やはり、仕事にイライラするとすぐに康子を殴るのがいけないのかなあ。オレの仕事は小説である。自宅が職場のため、つい家で発散させてしまう。

オレは何かストレス発散法を見つけないといけないなあと考える。そうしないとまた二の舞だ。

いろいろ考えて見て、音楽をどうであろう。オレは高校生のとき、ギターを弾いていた。

オレは家でやると近所迷惑なので、ギターを抱えて駅前へ行つた。「ボインなああの娘は、イエイ、イエイ、イエーイ」

実にノリノリ。ギターをむちゃくちゃにかき鳴らしながら、大声で叫ぶ。駅前交番のおまわりさんは注意しにこない。最近不況で事件が多い。忙しいのだ。通行人に聞いたら、今日も近くで通り魔事件が起こり、全員そっちへ行ってるらしいのだ。

オレは、疲れてきたので、家で作ってきたおにぎりを食べた。女子高校生といつしよに食べる。

なぜ急に女子高校生。

女子高校生は、今日は学校の創立記念日でお休みらしく、駅前でダンスをしていたのだ。

「ねえおじさん。コラボしない？おじさんの音楽に合わせてあたしが踊るとか」

「面白そうだな」

しかし話し込んでるうちに、なぜかラブホテルに行こうということになってしまった。犯罪の方へ行ってしまった。

結局、ラブホでやってしまった。

「あたし、おじさんと付き合いたいなあ。セックスむちゃうまいも

ん。同級生はへたくそでへたくそで」

「しかし、オレには妻がいるからなあ。それに犯罪だし」

女子高校生はぶくうと頬をふくらませる。かわいいなあ。若い子はええなあ。

結局、アドレスだけ交換して、別れた。

野田公園の前のアパートに住んでいた西田カツオは別に上司に文句があるわけではない。その背後にあるもの。会社？いや別に会社に文句があるわけではない。その背後にある時代や社会に文句がある。

実際のところ、労働者をこんな低賃金で使っていていいわけがない。無論、高賃金もあかんよ。無駄に価格がはねあがる。普通でええ。しかし、実際は普通よりかなり下の安い賃金で労働者をこき使っている。

しかも、腹立つのは一部の労働者、つまり、非正規労働者にのみ負担をかけさせてる。正社員や公務員は相変わらず高い報酬を得ている。

バカげたことである。時代が変わったことにみんな気づかないといけない。昔は非正規は非正規の仕事をしたりやよかった。好景気の時代は。その時は低賃金でもよかったわけである。

しかし慢性的な不況時代に突入し、非正規労働者も社員に近い業務を負うようになった。それなのに依然として社会保障がなされない。こんなアホな話があるか。

理由は簡単でそういうシステムにしておけば、正社員や公務員がラクできるからである。やつらのラクのために今、非正規労働者は地獄の苦しみを味わっている。

野田公園に住んでいた太田喜太郎は、塾で非正規講師をしていた。この塾の室長（社員）が最悪に極悪な女で、安い給料でめちゃくちゃにこき使う。その上、自分はラクをし、高い報酬をゲットする。地獄に堕ちるべき女だ。

喜太郎は殺したくてたまらない。この前も、生徒の成績が下がっ

たことにより時給を300円から250円に下げられた。

この女にはたった時給300円で出社してくれることの有り難みがまるで解っていない。

喜太郎はある日、このままでは生存権を侵害され殺されると察知し、室長をナイフで刺殺。「うぎやああああああ」逃走した。

ある日、新山たけおは、事件に巻き込まれた。

それは野田公園前のコンビニでの出来事。深夜12時。残業が終わり、煙草と缶コーヒーを買おうと思い、コンビニに入った。

「げ」

キャップかぶってサングラスしてマスクしてる。いかにもといった男が、やはり当たり前のように、店員に包丁を突きつけていた。

やだなあ。と思いつつ、店を出ようとしたその時。

男がたけおに近寄った。

「おい」

「な、なんですか」

男はキャップをとりサングラスをとりマスクをとった。

「げ」

たけおは口をぱくぱくさせる。なんとその男はたけおだったのだ。

「な、なぜオレが」

「ふん。お前、低賃金重労働がつらいと言っていただろう。だからオレが代わりにコンビニ強盗をしてやってるのさ」

たけおはパニクった。こいつが逮捕されるとオレの顔が新聞に載るな。これじゃあ仕事に行けない。

「なあお前、包丁しまえよ」

「何だと手前。お前のためにオレはだな」

店員が内通で呼んだのか、しばらくして警官が来た。

無論、ビックリしてた。

「お前ら、双子か？」

「そついうわけじゃねえよ」

「なあ」

腹がいっぱいになってきたので、木の下で休む。文庫を開く。夏目漱石だ。

夢中で読む。

眠くなってきたので寝た。

夢の中でサメに追いかけられていた。

よしぞーは目が覚めると朝になっていた。

よしぞーは自販機でコーヒーを買って飲む。元気が出てきたのでまた包丁を持って振り回す。

登校中の中学生を次々と刺していく。

よしぞーの活躍は始まったばかりだ。

野田公園に住んでいたよしおの嘆き。

これからどうすればよいのか。真剣に悩む。人生の岐路。

正社員かプロ作家か。人から見ればどうでもいいことだが、オレとしては真剣だ。

バイトの時点で相当苦しい。正社員かプロ作家になれば余計苦しいだろう。それはわかる。

しかし、正社員かプロ作家にならないと、一生結婚して子供を作ることができない。それはそれでつらい。

三田よしおはバイトが終わってから本屋へ行き、求人雑誌を一冊購入した。

テントでそれを眺める。

「なにこれ！」

三田は驚愕した。月収1000万円。

「そんなバカな」

1000万円など、バイトなら八年くらい勤務しないともらえない。

しかも、業務内容が書かれていない。採用してから話しますと書かれてある。あやしい。明らかにあやしい。

三田は面接を受けようと思いケータイを握ったが、やめた。怖い。
「なんだこれ」

今度は、月収7万円。バイトよりひどいではないか。バイトなら一日八時間週5で働けば13万くらいもらえる。

内容は、一日100キロ以上走る仕事、休みは月に一日と書かれてある。

もちろん、三田は面接に行く気すらしない。

野田公園の北にぼく（たけひこ）は住んでいた。

隣のフランスおばさんは別にフランス人じゃない。フランス人のような顔をしてるのでそう呼ばれてるだけ。鼻が高い。もちろん、日本人だから日本語をしゃべる。

フランスおばさんは昨年交通事故で旦那さんをなくした。だから欲求不満らしく、隣に住んでる中学生のぼくにやたらアプローチをかけてくる。

「たけちゃん。ケーキあるよ。うちにおいで」

「わーい。やったあー」

と喜んでひよこひよこ行ったのが失敗だった。フランスおばさんはケーキを食べてるぼくに「口にクリームついてるよ」と言って指でクリームをとった。

「あ、ありがとう」

そこまではまだいいが、その指をなめるのである。

ぼくはぞっとした。

しばらくすると、フランスおばさんはいきなりぼくの股間を触ってきた。

「し、失礼します!」

ぼくはあわてて逃げた。

そんなわけだから、ぼくはフランスおばさんにあまり会いたくない。

けど、お隣なので朝とか会ってしまう。

ゴミ袋を出しに行く途中のフランスおばさん。「たけちゃん。い

つてらっしやい」

「い、行つてきます」

フランスおばさんはＴシャツだったけどノーブラだった。乳首が透けて見えていた。

ぼくはちよつと勃起してしまった。あれえ。おかしいな。ぼく、フランスおばさんのこと好きなのかな。

ある日、フランスおばさんが、たけちゃん映画観にいこうと電話してきた。

また股間を触られるんじゃないかとビクビクしていたが、ちよつどぼくが観たかった「お尻くんの逆襲」だったのでOKした。

休日に、フランスおばさんの家のドアをノックした。

「わぁ！」

何ということ。胸がきゅんとしてしまった。すごくかわいい。服も髪型も化粧も素敵。ライスがファッションに疎いので細かくは描写できないが、女とはこんなにも変わるものなのか。

「光子さん、きれい」

思わず、口に出して言うてしまった。

「今日はたけちゃんとデートだからね！」

フランスおばさんがぼくの腕に抱きついてきた。

デートではないんだがなあ。

「行こ？」

「う、うん」

ぼくらは映画館に向かった。

急に話とはび、ぶちえの学生時代の話である。

「ゴルゴ。一緒に帰ろう」

「いいヨ」

ぶちえとゴルゴは学校を出た。

前から怖い野良犬が歩いてくる。

「お嬢さん。オレと一緒にカラオケに行こう。カラオケでエッチなことをしよう。断ったら殴る」

「こわいよう」

ゴルゴがぶるぶる震えた。

「ちゃうちゃう。太眉毛のおっさん。お前にゆうたんじゃない」

ゴルゴはカチーンときた。

野良犬を持ち上げ、アスファルトに叩きつけた。

「うぎゃああああああ」

「あらっあたしったら。おほほほほ」

「ゴルゴ、すごーい」

野良犬は覚えてると言つて足を引きずりながら逃げた。

ゴルゴとぷちえは商店街の精肉店でコロッケを買った。

「ゴルゴ。公園で食べよ？」

「うん！」

二人は公園のベンチに座った。

鳩が群がってくる。

「お嬢さん。コロッケ食べたい」

「ぼくも」

「コロッケちよーだい」

「困ったわねえ。一個しかないし」

「ぷちえ。無視しよう」

「う、うん」

ゴルゴがあーんと大きな口を開けてコロッケを放り込んだら、鳩が口に飛び込んできた。

鳩はゴルゴの口の中に首を突っ込み、コロッケをむしゃむしゃ食った。

「おのれ。このくそがき」

ゴルゴは鳩をつかんで、ライターで焼いた。
丸焼けの鳩をバリバリ食うゴルゴ。

「んまい。ぷちえも食う？」

「あ、あたしはいいよう」

いつの間にか、ほかの鳩は逃げていた。

ゴルゴとぶちえは公園を出た。

歩いていると、前からイケ面が歩いてきた。ゴルゴの目がハートになった。

「お嬢さん。喫茶店に行きませんか」

「そ、そんな。あたし、恥ずかしい!」

「ちやうちやう。太眉毛のおっさん。オレはこっちのかわいい子に言ってるの」

「!!!!!!」

ゴルゴはイケ面の身体を持ち上げた。

「ひいいい。助けてえええ」

アスファルトに叩きつけた。

「うぎゃあああああ」

「ふん。ちよつと顔がいいからつて調子に乗るな」

野田公園の前に木村ゴリオは両親と住んでいた。

現在、所持金8000円。おかんに一万円借りた。親父に2100円もらった。

給料日まであと11日。

今日、会社の飲み会で1500円。ケータイは今日止められた。8000円。

執筆ができないので、今日一日考え、明日には払う。

ケータイ・飲み代9500円差し引くと、一日1000円。

煙草300円(10月より410円)

銭湯代470円(休日は530円)

これが高いねんな。今、2箱吸って、毎日のように銭湯に行ってる。

これを一日1箱、銭湯も週に二回くらいにせんと。となると、ストレス発散の経路を別に作らないと。

小説や音楽・映画を遊び感覚でやる。

今、これらが仕事感覚になっていて、やるのがしんどい。趣味感覚で楽しんでやる。ストレス発散の経路とする。

新しいDVD・CD・本を買わずに、家にあるものを消費する。
作曲・執筆（それに伴う読書・音楽鑑賞・映画鑑賞）をストレス
発散の経路とする。

仕事も手を抜く。

勤務先の塾の生徒に迷惑かけない程度に。

給料日になったら、DVD、3980円かける2。

ガソリン代は絶対いる。

工夫して。前向きに。

仕事、手を抜く。一生懸命やりすぎ。

生徒に迷惑かけない程度に。

仕事、手を抜く。こんな賃金で一生懸命できるかつつの。企業
はアホだ。

生徒に迷惑かけない程度に。

仕事、手を抜く。ふざけるなつつの。

生徒に迷惑かけない程度に。

仕事、手を抜く。気を抜くな。

企業は早く雇用責任が果たせるような男になれ。

オレも早く自己責任がとれるように努力するから。

そして、よしかずは野田公園の西に住んでいる。

「華子。肩もんで」

「やだ」

「もんで」

「いや」

最近、娘の華子が生意気になってきた。昔はよくもんでくれたの
に。

オレ（よしかず）はやれやれと思い、新聞に目を落とした。ろく
なニュースやってない。

ため息も出てしまうというものだ。オレはうちわ仰ぎながら、早く
クーラー直さないとなあと思う。

「母さん。ちょっと出かけてくるわ」

「ごはんは？」

「腹へってないからいいや」

オレは、原付にまたがり、飛ばした。

二丁目にきたところで、原付をとめる。

「田中あ。おるかあ」

アパートの二階に向けて大声で叫ぶ。

二階の窓ががらつと開いた。

「ちよつと。よっちゃん。大声出すなよ。近所迷惑だよ」

田中の部屋に入る。田中がビールを放り投げた。オレはセンキュ
と言った。

「なんか最近ひまやねん」

「リストラされたそうだね。仕事してないんだろ？」

「そうなんだよ」

「よく生活できるね。よっちゃん」

「それがさあ。宝くじが三億円当たってしまったてね。再就職する気
せんのよ。十年くらい何もせんでも生きられるからね」

「でもさあ。十年後、どうすんのよ」

「そうだなあ」

田中と部屋を出て、田中のヘリコプターに乗った。

ぐんぐん上昇する。

「お前、大学の方がどうよ」

「また留年さ。真面目に講義受けてんのにね」

「そつかあ。まあゆっくりやれや」

「うん」

ヘリコプターは下降していき、牛丼屋の前に停めた。

「いらっしやいませえ」

なんと、この店は。牛が店員をやっているのか。

どっからどう見ても牛である。

「よっちゃん。オレ怖いよう」

「焦るな。大丈夫。兄さん。オレ牛丼ね」

「ぼ、ぼくも」

「あいよー」

牛の店員はしつぽでお尻をぺしんぺしんと叩きながら「牛丼、にちよー」と叫ぶ。

「うぎゃあああああああああ」

店の奥で叫び声。

「な、なんだよあれ」

「仲間を殺してんでさ。うう。オレたち牛だから」

なんかカナシイ雰囲気になってきた。食べる気分にならない。

オレたちはオーダーをキャンセルし外に出てヘリコプターに乗り込んだ。

ぐんぐん上昇。

あたりはだいぶ暗くなっている。

そしてまたある日。

嵐がすごい。風だ。強い風だ。雨だ。叩きつける。野田公園前にある自宅を出てからずっとこの調子だ。

オレ（かつよし）の傘などどこかにぶっ飛んでしまった。びしょ濡れになりながらオレは進む。進む。進む。

暗い。寒い。遠い。頭が少し痛い。

オレは時間を確認する。まだ大丈夫だ。

脇にあった喫茶店に入る。

店内はがらんとしていて客が少ない。

「何にします？」

わお。めっちゃかわいい子や。（今人気の女優の名前）ちゃんに似てる。ときどきときどきする。

「あのつええと。あなたのスマイルをください」

やっちまったーーーーーうわーーーー。

今どきそんなギャグあるかよ。ああ。やばい。

「いいわよ」

「え」

何と彼女はにっこりと優しくほほえんだ。

何だろう。この甘酸っぱい感じ。胸がきゅんとなる。

「でもスマイルはただだからね商売にならないよ。何か注文しな」

「う、うん。それじゃあ、抹茶ミルクとスパゲッティ」

ただ、結局食べ終わったあとにやっと気づいたのだが、オレは財布を家に忘れてきた。

そんなわけで物の見事に無銭飲食となり、オレはその喫茶店に住み込みで働くことになった。

「ほらっ焼き方が甘いわ」

「すすいませええん」

そうこうしてるうちに数ヶ月がたち、いつの間にかオレと彼女は結ばれ、結婚することになった。

野田公園の前に住んでいたぷりおのお父さんが首吊り自殺をした。若い。まだ40歳であった。理由はよくわかっていない。

ぷりおはしばらく学校に行かないで部屋に閉じ籠っていた。

カーテンもずっと閉めている。

ドアをノックする音。無視する。どうせ母さんに学校に行けと言われるだけ。

しばらくして鳴り止んだ。

ぷりおは、雑誌を眺めながら、空虚な気持ちになってる。

ああ。何をする気にもならない。

ぷりおはもう死んでしまいたい。

死にたい。

死にたい。

死にたい。

もう生きていたくない。死にたい。

ぷりおは死ぬ前にサーカスを見たかった。

見たかった！

ピエロの空中ブランコやライオンの火縄くぐり。象の玉乗りとかが見たかった。

でももう死ぬから見られない。あぁつまんない。

ぷりおは、わっと叫んだ。誰の返事もない。うるせえとか誰か言ってくれないのか。

ぷりおは、ロリ華にケータイしてみた。

「ぷりちゃん。早く学校に出ておいでよ」

「ぼくもう死ぬんだ」

「ふうん。それは大変ねえ」

なんちゅうあっけない態度だ。

「ほんとに死ぬんだよ！いいのかい！ロリ華ちゃん！」

「しょうがないよねえ。ぷりちゃんが決めたことだもの」

ぷりおはケータイを床に叩きつけ、マジで死んでやろうと思った。でも、痛いのはやだなあ。

ぷりおは、ラクして死ぬる方法はないものとネットを検索してみた。

「小説家になろう」というサイトを発見した。なにげにクリックしてみた。

無料の小説投稿サイト。

ぷりおはなにげに登録し、「死にたい」という200字くらいの詩を投稿してみた。

ぷりおは、読み返したら何だかムカついてきて、壁をどんと蹴飛ばした。穴が開いた。

ますます学校に行きたくない。うんざり。

ぷりおはイライラして、また壁をどんと蹴飛ばした。

また穴が開いた。

穴から変な音がする。ぷりおは不思議に思い、穴の中をのぞいてみた。

すると、そこには何ということか。後楽園ホールの光景が広がっていた。

わあああああああああ。

すごい熱気。ボクシングの試合をしてる。

「おりやつおりやつ」

「えいつえいつ」

試合自体はへなちょこ同士の戦いだったので大して面白くなかったが、穴の中がこういう感じになってるのが面白く、さっき開けた穴も気になった。

「ちよつと見るのが怖いなあ」

変なものがあつたらどうしようとかやや心配であつたが好奇心には勝てず、のぞいてしまった。

てか、普通だった。隣の妹の部屋だった。

妹がベッドの上でござござしてる。

「あん。ああん。あん」

ぷりおはいやな予感がして、さっと穴から離れた。

これは児童書だぞ！

とわけのわからぬことを脳内で叫んだ。

野田公園に住んでいた光本錦司の日記。

九月某日

無料投稿さいと「小説野郎になろう」で連載していた「ひつぷほつぷ武将」を新人賞に応募したら大賞をとったぞおおおお。

賞金は1000万円。副賞はグアム旅行。

なんとコミック化が決定しており、来月からスタート。映画化も決まっております、もうすぐ撮影に入るらしい。やっとうアパートに暮らせる。

九月某日

「ひつぷほつぷ武将」が発売されてから、一週間で二百万部が完売。予約も五十万入っている。漫画の世界ではよくあることだが小説では異例の事態。定価2000円だしね。

新人だから一万部くらいでいいのでは、というみんなの意見を押しきった社長は正しかった。

十月某日

銃刀法、児童猥褻禁止法、大麻取締法にひっかかり、逮捕。

十月某日

刑務所内で、ひつぷ第二部の執筆に入る。

野田公園の北を少し歩いたところに、田村真二の住むアパート「河合荘」がある。

真二は、ある日、部屋でテレビを観ながらチキンラーメンを食べていた。

ぶるるるるる。

「はい。田村ですけど」

「あつ真ちゃん？あたし。奈津子」

「なっちゃん」

真二は奈津子に誘われ、深夜映画館に行くことになった。

ジャンバーを着て歩く。

奈津子の家まで迎えに行き、さらに歩く。

須田公園内にボックスがある。その中はエレベーターになっている。

二人はエレベーターに乗り込み急降下。

地下九階に深夜映画館がある。

暗くて落ち着いた雰囲気。二人はパンフレット、ポップコーン、

コーラを買い席に着く。

ブザーが鳴った。

野田公園の近くにある、とある正当の事務所ビル。

ああ。だるい。むっちゃだるい。

だるまちゃんは、倉庫で憂鬱にしていた。

だるまちゃんは、とある政治家の選挙用に使われたのだが、結局、

政治家は落選し、目に丸を入れずに次回用に、ということで、政党の事務所の倉庫の中に放り込まれたのだ。暗い暗い倉庫の中。

「あーあ。次の選挙までまだ何年もあるものなあ。退屈だなあ」

だるまちゃんは、倉庫に隠してあったエロ本を眺めながらため息をつく。

すると、机の上に乗っていたフランス人形のカトリーヌが「やらしいわね!」とだるまちゃんをたしなめる。

「そんなこと言っただけでしょうがないよ。ばく、男子だもん」
「最低!」

カトリーヌがだるまちゃんのことを好きだということのだるまちゃんには知らない。まさか、だるまがフランス人形に好かれるなんて思っただけなのだ。

ただ、だるまちゃんにも一応礼儀があるので、エロ本をしばらく読んだら、きちんと、本棚にしまった。

「あーあ。退屈だなあ。ふあああ」

野田公園を5分ほど歩いたところにあるサッカー競技場での話。

すなわち、ワールドカップ。恐ろしい……恐ろしすぎる。怖いのが苦手な人は読まないでください。

日本vsポメポメボーン戦。

試合開始のホイッスルが鳴ると、センターサークルでいきなりポメの選手がスイカを蹴った。

もちろん、割れた。汁や種が飛び散った。

恐ろしすぎる。これが世界か。日本の選手は完全にど胆を抜かれていた。

しかも、ポメの選手はスイカをしゃりしゃり食ってる。審判にポメ語で「塩ない?」なんて聞いている。

ああ。ポメは南国なのか。

ともかく、これでは試合にならないということで、普通のサッカーボールを持ってきて試合再開だ。

またアクシデントが起こった。ポメのディフェンダーとキーパー

がいきなり、ゴールをひっくり返し、その上に乗り、シュートコン
トを始めるのだ。

はつきり言つて、ポメ語でやってるのでおもしろいのかつまらんの
か、さっぱりわからない。雰囲気からして、医者と患者のコントだ
ということはかるうじてわかったのだが。

恐ろしすぎる。世界の壁はこんなにも厚いのか。

日本選手はぶるぶる震えている。別の意味で。

とにかく、そんなこと言つても試合が進まないの、とりあえ
ずゴールを直し試合再開だ。

「わあああああああ」

「うおおおおおおお」

いきなりポメの選手が刀や槍を振り回し、日本選手に突っ込んで
くる。

馬にまたがつてマシンガンを乱射してるヤツまでいる。

審判はいったい何をしてるんだ！

審判の一人が注意しようとして馬に蹴飛ばされた。

ゴール！

「一点！」

何ということだ。先制点はポメ。しかも、審判がゴール。得点し
たのが馬。

ウマイこといったね。

全然、上手くねーっ！

さすがに日本の監督が抗議に行った。

あ。馬に蹴られた。

またもやゴール。

「二点！」

や、やばい。このままでは日本が負けてしまう。

野田公園の近くに住んでいたオレ吉島は、海を越え、南の島に來
ていた。

南国の太陽がさんさんと照りつける。海は薄めのブルー。透き通

つてる。きれい。まるできみの肌のよう。

となりにいるビキニ姿の彼女の胸に手を伸ばす。腕をつねられる。

「いてえ！」

「BBQの時間よ！」

彼女ははりきって肉やらピーマンを串に刺して行く。そんな彼女を見ながら、オレは、彼女を食べたいなあと思う。

彼女のお尻に腕を伸ばした。

彼女が串でオレの目を刺した。

「うぎゃわあああああ」

目の前が真っ暗だ。何も見えん。流血の惨事。

「ふん。やらしい目であたいを見るんじゃないよ」

彼女はかまわず焼いて行く。

オレはあまりの痛さに浜辺に転がり回り、砂まみれ。

薄いブルーの海は何も言わない。薄情なやつだ。

オレはそのまま気を失った。

数時間後。

オレは目が覚める。あ。目え治ってる。

大きなベッドの上にいる。窓からは薄いブルーの海が見える。

彼女がオレンジジュースをお盆に乗せて持ってきた。

「ずいぶん長いこと寝てたねえアンタ」

「何か知らぬ間に目が治ってますけど」

「ふん。またあたいをやらしい目で見てるね」

オレはあわてて目をガードした。

すると、彼女はオレの背中にもたがった。

「ほれ。飛んでみい。あたいを乗せて空飛んでみい。飛べたら胸くらいもませてやるよ」

む、無理だ。オレ、鳥じゃないもの。

野田公園の南に、清村泰三の住むアパートがあった。

ぼろぼろのアパート。築30年。木造。

四畳半。風呂はない。トイレは共同。おかげで家賃は安い。泰三

は非正規労働者であつたが借りることができた。敷金はちよつと高かつたけど。

泰三は、部屋で必死に小説を書いていた。
「うっん。なかなか上手くいかないなあ」

泰三は、書いては丸め書いては丸めの繰り返し。新人賞の締め切りが近い。焦る。

少し横になる。うとうとしてきた。

夢の中で、なつかしい女性が出てきた。大学時代に好きだった女の子。泰三はすでに34歳。いまだに童貞なのは、彼女のことが忘れられないのかもしれない。

女性は、夢の中では、カノジョという設定だった。腕を組んで歩いている。

まあそのあとも楽しい展開。

目が覚めると夜遅い。泰三はまわりを見渡しはあとため息をつく。独身のさびしい部屋だ。

泰三は、外に出て原付にまたがり銭湯へ向かった。

銭湯に着くと、同僚の錦野が車から降りるところだった。この錦野は泰三より十歳若いが正社員である。

「ははっ泰三さんやん」

「むっ。錦野。。。さん」

「非正規労働者でも銭湯来るんだ。あはっ
殴ってやりたい。」

「あまり湯船を汚さないでくれよ。正社員の身体が汚れちゃうからさ」

錦野はそのまま中に入ってしまった。

「くそ。錦野め」

泰三は悔しくてならない。若造になめた口を聞かれる。高齢非正規労働者のつらいところだ。

泰三は、休憩場でソファに座り、コーラを飲む。

「ああ。早く小説家になりたいなあ。小説が売ればあんな若造に

へこへこしなくて済むのに」

しかし、小説は厳しい世界である。何回も何回も応募してるが落選だ。

泰三は部屋に帰り、小説の続きにかかる。なかなか続きが浮かばない。

うとうとしてくる。畳の上に寝転ぶ。すぐに眠ってしまった。

夢の中でまた女性が出てくる。かわいい女性。

すぐに朝になる。夢の内容は全然覚えていない。

すぐ着替えてバイトへ行く。

バイトから帰ると小説を書く。少し寝る。

また起きて夜のバイトへ行く。

こういうことの繰り返し。

反復。

いつになればバイトを辞めることができるのか。プロ作家になれるのか。さっぱりわからない。不安である。

一生バイトなのではないだろうか。

そんな不安もよぎる。

自殺したくなる。正直、自殺したい。

しかし、また思い直す。小説を書かねば。

書いて売れて女房子どもをもらい家を建てないといけない。

そうしないと今までのバイト生活が無駄になる。正社員をあきらめ、小説を選んだのだ。

女性をあきらめ、童貞を選んだのだ。

小説を書かなければ何のためにそうしたのかわからなくなる。

戦え。

泰三は不安と戦いながら、今日も書き続ける。

泰三は、休暇をもらい、温泉に来ていた。机の上に原稿用紙を広げ書く。アパートにいと引きこもりそうなので、場所を変えたのだ。

温泉に入り、部屋に戻り、また書く。場所が変わったのでよい気

分転換になり、割と筆が進む。

「あーだいたい書いたな」

首をぽきぽき鳴らす。

料理を食べる。

そしてまた書く。

温泉に入る。

書く。

いつの間にやら深夜になっていた。

「明日、観光したいからもう寝ようかな」

独り言。誰に言ってるのかな。

しかし、アイデアが次々出てくるので書かないといけない。

もうすでに、何十枚も書いている。

さすがに五時には寝た。

夢の中にまた女性が出てきた。その女性は「がんばって」と泰三を励ました。

昼に目覚める。

料理を食べたあと、旅館を出て、町をぶらぶらする。

アイデアが出てきたので、メモ用紙に書き込んでいく。

旅館に戻り、再び書き始める。

泰三は、アパートに帰った。

泰三は、休日に秘密映画館へ行った。野田公園内にあるボックスに入るとエレベーターがあり、それに乗り急降下。地下九階に秘密映画館がある。

泰三が今日観た映画は……秘密である。ちょっと書けないよ。かなりやばいからね。この小説を警察が読んでいたら逮捕されてしまうかも知れない。

泰三は地上に戻り、腹へったなあと思っていたら、いい匂いがする。

野田公園内に住んでるホームレスの人たちが鍋パーティーをしていたのだ。もちろん、ねこ鍋だけ。

「ミャーコちゃん。ミャオちゃん」

おぼはんがもうこの世にいない猫を探してる。

泰三が鍋をじっと見てたら、ホームレスのおっちゃんがお碗を差し出した。

「食べてきなよ」

「ありがとつす」

泰三は酒まで飲ませてもらった。

実に楽しい愉快である。

しばらくして、金属バットや角材を持った中学生たちが野田公園に来た。

おっちゃんがたがた震えている。

「ま、またあいつらだ。先週、山ちゃんがあいつらに殺されたんだ」

「??警察に言っただ？」

「だめさ。警察はホームレスのためには動いてくれない」

中学生たちはにやにや笑っている。

泰三はいやな予感がした。というより、このあと、いやなことが起こるのはだいたいわかる。ホームレスのおっちゃんたちのあわてようを見てたら解る。

中学生たちはゆっくりゆっくり近づいてくる。

このあとのことは残酷すぎて描写できない。ちびっこに精神的なダメージを与える。

泰三も巻き込まれてボロボロになった。

泰三はこの事件の影響で、中学生をボッコボコにする小説を書いた。自分がされたことを逆にしてやる小説を書いたのだ。

泰三は筆が進み、なかなか調子がいい。

ただちよつとバイオレンス過ぎて新人賞には応募できねえと思う。

仕方ないので金庫にしまって次回作に取りかかった。

ぴんぽーん。

来客である。バイト仲間の恭二だった。

恭二といつしよにたまにコント撮影をする。

今日は、台本作成であつた。

無論、素人なので大がかりなセットは使えない。

二人でああでもないこうでもない議論する。

結局ストーリーがでくなり過ぎて、泰三はそれを小説にすることにした。泰三にとっては得である。

しかしながら、恭二にとっては別には得ではないのでお礼に泰三は麻婆豆腐を作つてあげた。

「旨いねえ」

「ねこのひき肉使つてるけどな」

「え」

恭二が帰つたあと、泰三は小説を書く。二十枚ほどのコメディ。元々コント撮影用の話なので舞台は固定されている。

十枚ほど書いたところで気分転換に原付にまたがり銭湯へ向かつた。早く行かないと閉まつちゃう。

あわて過ぎて、途中で野良犬をはねる。

「だつ大丈夫ですか！」

泰三は原付から降り、あわてて野良犬のところに駆け寄る。

「いててて。ひどいよ」

「ごつごめんなさい！」

泰三は野良犬を背負つて病院まで連れて行つた。

泰三は、ある日、勤務先の塾に新しく入った大学生の女性講師に一目惚れしてしまった。実に十年以上ぶりくらいの恋である。

「何かわからないことがあつたら聞いてね」

「ありがとう」

笑顔が優しい子だな。

泰三は部屋に戻るとその子を想像して、まあそういうことをしてしまう。

なかなか仕事に行くのが楽しくなってきた。

ただまあ童貞生活の長い泰三である。どうするというものでもな

い。そもそもプロ作家になるまで女禁止にしているものでどうにもならない。悲しいことである。

泰三は、その子（ロリ華という）をヒロインにし、自分を主人公にし小説を書いた。完全にオナニー小説である。新人賞とか関係ない。

そんな泰三ではあったが、ある日、車にはねられて死んでしまった。

飛び出した子どもを助けて。。。とかだったらカッコいいけど、実際は落ちてた百円玉を拾おうとして。。。多くは語るまい。悲しすぎる。

泰三は身内がいなかったため、葬式を上げることができなかった。遺体はホームレスのおっちゃんたちが野田公園の木の下に埋めた。

野田公園に、新しいホームレスが加入した。もともと中小企業の社長をやっていたが倒産してしまい、ホームレスになったってわけ。名を、吉村泰三。なんとまた泰三だ。

泰三は、とにかく、食っていかないといけないのでバイトを始めた。しかし、今は不況で時給が300円から350円が相場。アパート代はこの地域では五万円が相場。とても公園から出られない。

雨の日も風の日も公園から会社に通った。

こんな日本は狂ってますか？まともですか？

世間の解答は明快です。

泰三が狂ってる、と。

その方がラクだからね、世間は。

良心が痛まないからね。

まったく腐った国だ。

それでも泰三は日々、お客様のために仕事に励む。お客様の笑顔。それがなによりの報酬。企業が社会保障せずとも、政府が援助せずとも関係ない。カネのために働いてるわけではない。お客様のために働いてるのだ。

泰三はある日、公園生活の無理がたたたり、テントでひっそり死ん

だ。

+ 注意 +

- ・特に記載なき場合、掲載されている小説はすべてフィクションであり実在の人物・団体等とは一切関係ありません。
- ・特に記載なき場合、掲載されている小説の著作権は作者にあります（一部作品除く）
- ・作者以外の方による小説の引用を超える無断転載は禁止しており、行った場合、著作権法の違反となります。

この小説はリンクフリーです。ご自由にリンク（紹介）してください。

この小説はケータイ対応です。ケータイかパソコンかを自動で判別し、適切なページを表示します。

小説の読了時間は毎分500文字を読むと想定した場合の時間です。目安にして下さい。

縦書 横書き切替 大中小 小説家になろう 小説を読もう！
作者マイページ TXTダウンロード ケータイ表示 情報提供
▲ページの上部へ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8614x/>

ブラック・コーヒー（改稿版）

2011年10月24日03時21分発行